

42300

教科書文庫

| |
|------------|
| 4 |
| 810 |
| 42-1933 |
| 2000301834 |

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

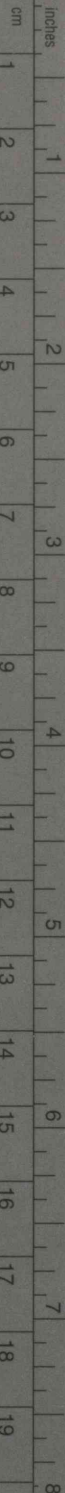


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Y619
資料室

新定女子國文

改訂版

卷八



資料室

3759
Y019

昭和八年一月十八日
文部省檢定
高等女子學校國語科

吉田彌平編

新定女子國文 卷八

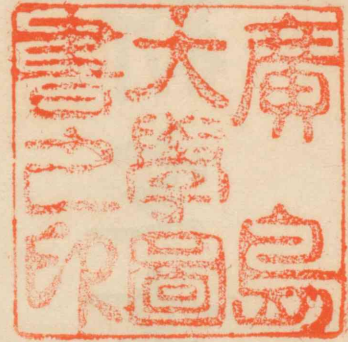
改訂版

金港堂書籍株式會社



(筆崖芳野狩)

音觀母悲



新定女子國文卷八

目次

- 一 皇大神宮……………本居宜長……………一
- 二 偉人と文學……………芳賀矢一……………三
- 三 ソクラテス最後の教訓……………穂積陳重……………九
- 四 いさよふ月……………阿佛尼……………二二
- 五 四時のあはれ……………兼好法師……………二四
- 六 朝鮮の四季……………遅塚麗水……………二六
- 七 蜜柑……………芥川龍之介……………二八

| | | | |
|----|--------|--------|----|
| 八 | 狩野芳崖 | 岡倉覺三 | 四 |
| 九 | 梁川星巖の家 | 三浦耀 | 五 |
| 一〇 | 山路の菊 | 三浦耀 | 六 |
| 一一 | 歌人逸話 | 正宗敦夫 | 七 |
| 一二 | 銀線を描く | 浦松佐美太郎 | 八 |
| 一三 | 寺子屋 | 竹田出雲 | 九 |
| 一四 | 日本の女性 | 土井晚翠 | 一〇 |
| 一五 | 大人と子供 | 相馬御風 | 一一 |
| 一六 | 同じ人間 | 渡邊華山 | 一二 |
| 一七 | 梅花 | 豊島與志雄 | 一三 |
| 一八 | 重盛諫言 | 〔平家物語〕 | 一四 |
| 一九 | 樟の樹 | 與謝野寛 | 一五 |

| | | | |
|----|------|----------|----|
| 二〇 | 雀 | 〔宇治拾遺物語〕 | 一六 |
| 二一 | 雛祭 | 藤井乙男 | 一七 |
| 二二 | 日本文化 | 西田直二郎 | 一八 |



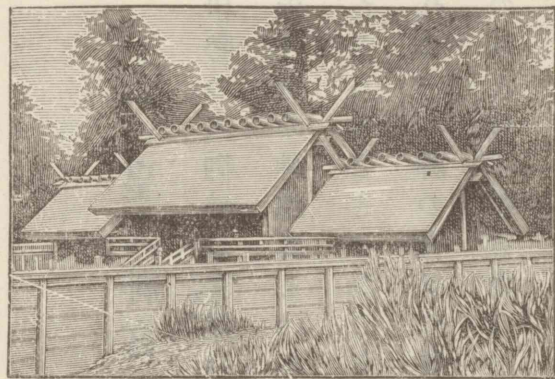
本居宣長
江戸時代の國學四大
人の一人
號は鈴の屋
伊勢松阪生
賀茂真淵の門人
享和元年(一八一六)癸
年七十二

新定女子國文卷八

一 皇大神宮

本居宣長

伊勢の大御神の宮殿みゑらの茅草なるを、後世に質素を示す戒なり。」と
近き世の神道者といふものなどのいふなるは、例の漢意かむじょうに詔ひ
たるうるさきひがごとなり。質素を貴むべきも事にこそはよ
れ、すべて神の御事に質素をよきにすることさらになし。御殿みゑら
のみならず、獻る物なども何も力の堪へたらむかぎりうるはし
く、いかめしく、めでたくすること、神を敬ひ奉るにはあれ。御殿
又獻り物などを質素にするは禮れいなく心ざし浅あはきしわざなり。



皇大神宮

そも、伊勢の大宮の御殿の茅葺なるは、上つ代のよそひを重みし守りて、變へ給はざるものなり。而して茅葺ながらにそのいかめしきことの世に類なきは、皇御孫命の大御神を厚く尊み敬ひ奉り給ふが故なり。さるを御みづからの宮殿をばうるはしくものし給ひて、大御神の宮殿をしも質素にし給ふべきよしあらめやは。すべて近き世に神道者のいふことは、皆漢意にして

古の意に背けりと知るべし。(本居宣長全集 玉勝間)

二 偉人と文學

芳賀矢一

芳賀矢一
國文學者
文學博士
東京帝國大學名譽教授
福井生
昭和二年薨
年六十一

月明らかに
月明ラカニ星稀ニ鳥
鶴南ニ飛ブ
フレデリック大王

Frederick
The Great
(1712-1786)

サンスシー宮
伯林の附近ボツ
ダムに在る宮殿

Sans Souci

文豪
ヴォルテール

文學といふものは、國家から見れば、國民精神の宿る所で、個人から見れば、高尚な氣品の流露である。立派な文學のある國は其の國の品格も一段と高く見え、文學の嗜がある偉人は一入懐かしい心持がする。魏の曹操は其の事功の上から見ては、餘り好かれぬ人物であるが、槩を横たへて「月明らかに星稀に」と歌つた一事を想ひ出すと、何となく慕はしくなつて來る。普魯西のフレデリック大王は賢君として名高い王様であるが、其のサンスシー宮の中に佛國の文豪と交つて、靜かに文學に耽られた事を考へると、尙更貴い感を起す。「英雄閑日月あり」といふ語がしみじみと身に染みて景慕の念を生ずる。源頼光や頼信よりも八幡太郎義家の方がえらく思はれるのは、

道もせに
吹く風をなこそその關
と思へども道もせに
ちる山櫻かな(千載
集)

衣のたては

年をへし絲のみだれ
の苦しさに衣のたて
はほころびにけり
(古今著聞集)

しひを拾ひて

登るべき便なき身は
木の下にしひを拾ひ
て世を渡るかな(源
平盛衰記)

弓張月の

時鳥名をも雲井にあ
ぐるかな弓張月のい
るに任せて(源平盛
衰記)

埋木の

埋木の花さくことも
なかりしにみのなる
果ぞかなしかりける
(源平盛衰記)

假の契を

とても世にながらふ
べくもあらぬ身の假

勿來關に馬を停めて、道もせに散る山櫻かな。と詠んだ風流、衣川に矢を番つて、衣のたてはほころびにけり。と呼止めた情致がある爲で、これは其の後の爲義にも、爲朝にも、義朝、義平にも眞似の出來ぬところ。源三位頼政の「しひを拾ひて世を渡るかな」はあまり感心せぬが、弓張月のいるに任せて、「埋木の花さくこともなかりしに」などの韻事があつた爲に、後世にまでその名が高くなつたのであらう。小楠公をして一層美的ならしめるのは、假の契をいかで結ばむの歌と、梓弓無き數にいるの辭世とである。平忠盛に、波ばかりこそよると見えしかの風流があつて、眇の俄殿上人も優にやさしい感を與へる。これ淨海入道の及ぶ所では無い。頼朝の「陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ」をおもへば、義經や範頼を殺す程の人とは思はれぬ。西行法師との談話に

のちぎりをいかで結
ばむ(吉野拾遺)

梓弓

歸らじとかれて思へ
ば梓弓なき數にいる
名をぞ留むる(太平
記)

波ばかりこそ

有明の月もあかし
の浦風に波ばかりこ
よると見えしか(平
家物語)

陸奥の

陸奥のいはでしのぶ
はえぞ知らぬ書きつ
くしてよ壺のいしぶ
み(新古今集)

も幾分の風流譚が交つて居たらうと想像される。其の子實朝に至つては更に歌の名手。これは源氏の武將中の第一で、曩祖八幡太郎の文學的方面はこゝに最大の發達を遂げて居る。頼朝の覇業は三代でほろびたが、實朝の文學は千古不朽である。文學者の文學は當然であるが、政治家なり、武人なり、他の方面の人で風流譚のあるのは、非常に其の人品を高くするもので、時には其の人の闕點まで蔽ふやうな心持がする。實朝が源氏の末路を飾ると同じやうに、平家の末路を飾るものは薩摩守忠度である。平家の公達には歌を詠んだ人は澤山あるが、忠度が都落に馬を乗返して俊成卿の門を叩いた一話は、最も美はしい永久の語草である。

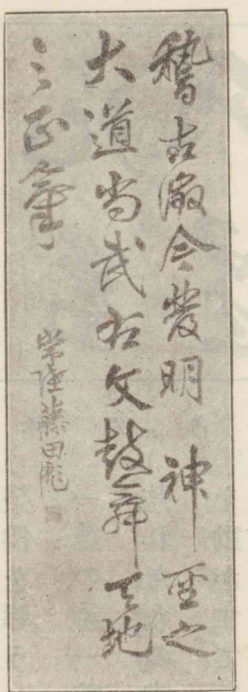
武士は情を知らなければならぬ、武人として文事の嗜がなくて

霜は軍營に満ちて
 霜ハ軍營ニ滿チテ秋
 氣清シ。數行ノ過雁
 月三更。越山併セ得
 タリ能州ノ景。遮莫
 家郷遠征チ憶フ。
 妻は病牀に臥し
 妻ハ病牀ニ臥シ兒ハ
 飢ニ泣ク。此ノ心誓
 ウテ戎夷ヲ拂ハント
 擬ス。今朝死別ト生
 別ト。唯皇天后土ノ
 知ルアリ。
 誰か知らん
 誰カ知らン
 苦冤洗ヒ難ク恨禁ジ
 難シ。俯シテハ則チ
 悲痛シ仰イテハ則チ
 吟ズ。昨夜城中霜始
 メテ隕ツ。誰カ知ラ
 ン松柏後凋ノ心。
 誰カ題セン
 雲ヲ排シテ手ヅカラ
 妖炎ヲ掃ハント欲ス。
 失脚墜チ來ル江戸ノ
 城。井底ノ痴蛙憂慮
 ニ過ギ。天邊ノ大月
 高明チ缺ク。身ハ鼎
 鑊ニ臨ンテ家ニ信無

はならぬとは、武家の家訓として必ず教へた事柄である。武田氏・北條氏・長曾我部氏・加藤氏等の家訓は皆之を歌つて居る。それであるから、戦國時代にも風流の心得のある武人が中々に多い。承久の役に院宣を読み得る人が無かつたなどといふのは、本當の武士の無かつた證據。北條氏康・毛利元就・太田道灌などは皆和歌風流の嗜が深かつた。豊臣秀吉を無風流の人と思ふのは大間違、吉野の花見には諸大名もそれ〴〵詠歌をものして居る。上杉謙信が「霜は軍營に満ちて」の一吟は人をしてまづ之に同情せしめる所以で、其の襟度の遙かに武田信玄以上だと思はしめる最大の原因となつて居る。其の家來の直江兼續も文學の素養から其の風采を想望せしめる。多くの傳説を集め得た源義經や、武將の典型と見られた加藤清正に風流韻事の傳は

筆蹟
 古ナ稽ヘ今ニ徴シテ
 神聖ノ大道ヲ發明シ、
 武ヲ尙ビ文ヲ右ケテ
 天地ノ正氣ヲ鼓舞ス。
 常陸藤田彪
 月照
 京都の清水寺の僧で
 勤王家
 安政五年(三五〇)
 西郷隆盛と相抱いて
 薩摩灣に投じて死ん
 だ
 年四十六
 伴林光平
 勤王家で歌人
 元治元年(三五四)卒
 年五十七
 望東尼
 野村もと
 女流勤王家
 慶應三年(三五七)卒
 年六十二

らないのは何となく物足りない心地がする。梶原景時・明智光秀の時にとつての連歌などが、稍、其の憎しみを減じさせるのも、文學のお蔭と謂はねばならぬ。幕末の志士は必ず何物かを口吟んで居る。藤田東湖の回天詩や正氣歌などは其の尤なるもので、梅田雲濱の「妻は病牀に臥し、兒は飢に泣く」橋本景岳の「誰か知らん松柏後凋の心」頼三樹三郎の「誰か題せん日本の古狂生と」を始め、佐久間象山でも、吉田松陰でも、僧月照でも伴林光平でも、乃至は望東尼でも、或は詩に、或は歌に、其の心事は永く其の文學に傳はつて、忘れようとしても忘れられない



藤田東湖筆

筆蹟
生レテ名臣トナリ、
死シテ列星トナル。
戊午仲秋病問書
景岳紀

生 爲 名 臣
死 爲 列 星
戊午仲秋病問書
景岳紀

筆 内 左 本 橋
やうになつて居る。是等の志士は天下の憂に先だつて憂へた人、其の志を繼いだ人々は、却つて明治の世には公となり侯となり伯となつて榮爵を辱うしたが、そんな人よりも、一篇の詩、一首の歌を留めて國難に斃れた人の方が千秋萬古人の情緒を動かすであらう。
文學は廣い意味でいへば固より詩歌のみに限らぬ。併し日本でも文學の他の方面は從來閑却せられて居つたので、小説や戯曲に意見を吐

ソクラテス

Socrates (前470—前399)
者 希臘の大哲學
プラトンの師

穂積陳重

法學者
法學博士
東京帝國大學名譽教授
樞密院議長
男爵
大正十五年薨
年七十

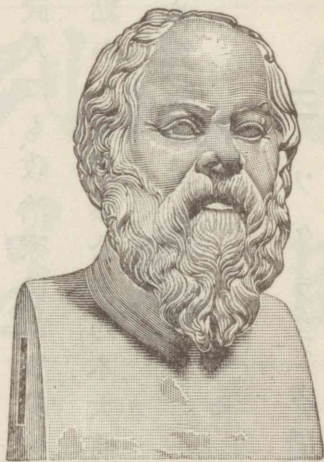
露したり、理想を披瀝したりする事は無かつた。これからはそれも出來よう。政治家でも、實業家でも、武人でも、後世に名を残さうと思ふ人は、文學に筆を染めることに心懸けるがよい、否々平生から文學に心懸ける程の襟度の人であつて始めて立派な武人にも、政治家にも、實業家にもなれるのであらう。余は此の點から故伊藤公や乃木大將に一層深い敬意を表せず居られぬのである。(筆のまに〜)

三 ソクラテス最後の教訓 穂積陳重

大聖ソクラテスの與へた最後の教訓は、實に國法の威嚴に關するものであつた。
今を去ること凡そ二千三百有餘年の昔、彼が單衣跣足の姿で、當

アテネ
Athenai
古代ギリシャ文
化の中心であつ
た市

時世界の文化の中心と稱せられて居つたギリシャのアテネの市中、群衆雑沓の各處に現れて、其の獨得の會話法に依つて自負心の強い市民を教訓指導し、就中好く青年輩の指導教訓に力を



ソクラテス

致したことは、甚だ顯著なる事實である。もとよりソクラテス自らは決して一世の指導者を以て敢へて自任して居たわけではない。唯人々と共に眞善の何ものなるかを知らうと欲したのであつた。しかしながら、彼の眞意を了解しない大多數の俗衆は、却つてソクラテスのために、各自の自負心を傷つけられたものと考へ、これがために彼に對して怨を抱くこととなつたが、終に或機會を以て、彼は新

メレイトス
Meletus
悲劇詩人

アヌトス

Anytus
(一前399)
アテネの人

クリトーン

Criton
アテネの人

宗教を輸入唱道して國教を顛覆し、且又詭辯を弄して青年の思想を惑亂する者であると云ふ事を訴へられることとなつた。かくてメレイトスやアヌトスなどの詐言のために、とやかくといろ／＼瞞着された結果、種々の裁判の末に我が大聖ソクラテスは遂に死刑を宣告せられることとなつた。大聖ソクラテスは、さて、いよいよ死刑が執行されるといふ日の前日になつて、ソクラテスの門弟の一人なるクリトーンはソクラテスに面會して、此の不正なる刑罰を免れるために脱獄を勧めようと思つて、早朝其の獄舎に訪ねて來た。來て見た所がソクラテスはさも心地好ささうに安眠して居つたのである。クリトーンは、師が其の死期の刻々に近づきつゝあるにも拘らず、かく平然自若たるを見て如何にも感嘆の情を禁めることが出来なかつたが、やが

てソクラテスの眠より覺めるのを待つて、脱獄を勧めた。クリトーンは、裁判の不正なること、刑罰の不當なることを説いて、師がかく生命を保ち得られる際に、自ら好んで身を死地に投じて之を放棄せられるのは、寧ろ悪事を敢へて爲さんとせられるものであつて、今甘んじて此の刑に就くのは、これ即ち敵人の奸計に黨するものであると謂はねばならぬと述べ、又此の際、妻や子供等を見捨てるのは、師が平素から、子供を教養することの出来ない者を儲けてはならぬと云はれて居つた垂訓にも悖るものであり、又此の容易にして且危険のない脱獄を試みないのは、畢竟、善にして勇なる所業を爲さないものであるから、平生徳義の貴ぶべきことを唱道せられた師としては、甚だ不似合なことで、自分は、師のためにも、はた又其の友たるクリトーン自身の

ためにも、慚愧の念に堪へざる次第であると説き、尙その辭をつづけて、

さあ、どうぞ此處を能く、御考へ下さいまし。否、もう御熟考の時は已に過去つて居ります。——私どもは決心せねばなりません。——今の場合、私どもの爲す可きことは唯一つだけ、——而も、それを今夜中に決行せねばなりません。——若し此の機を外したなら、それは、とても取返しが付きませぬ。——さあ、先生ソクラテス先生、どうぞ私の勸告をお聽入れ下さいまし。

情には脆く、心は激し易いクリトーンが、かくも熱誠を籠めて、其の恩師に對つて脱獄を勧めたのであつた。ソクラテスは、其の間、心靜かに、師を思ふ情の切なる此の門弟子の熱心なる勸誘の

言葉に耳を傾けて居つたが、やがて徐に口を開いて答へて云ふには、

親愛なるクリトーンよ、汝の熱心は、若しそれが正しいものならば、其の價値は實に量るべからざるものである。が、しかしそれが若し不正なものであるならば、汝の熱心の大なるに随つて、其の危険も亦甚だ大なるものではあるまいか。それ故余は先づ、汝の余に勸告する脱獄といふ事が、果して正しい事であるか、或は又不正の事であるかを考へる必要がある。余はこれまで、何時も熟考の上に、自分でこれが最善だと思つた以外のものには何物にも従はなかつたものであるが、それを今このやうな運命が俄に我が身に降りかゝつて來たからと云つて、自分のこれまで主張して來た道理を、今更投棄してし

まふことは決して出来るものではない。否、却つて余に取つては、是等の道理は恆に同一不易のものであるから、余の従前自ら主張し、尊重して居つたことは、今も尙余の同じく主張し尊重するものであるのだ。

と述べ、尙言葉をついで、
唯生活するのみが、貴いのではない。善良なる生活を營むのが貴いのである。他人が己に危害を加へたからとて、我も亦他人に危害を加へるなら、それは、惡を以て惡に報いるもので、決して正義とは云へない。して見れば、今汝が云ふやうに、假令アテネの市民等が、余を不當に罰しようとも、我は決して之に報いるに害惡を以てすることは出来ないのである。
と云ひ、又

若し余が此の牢屋を脱走せんとする際、法律及び國家が來つて、余に「ソクラテスよ、汝は何を爲さんとして居るか。汝が今脱獄を試みようとするのは、即ち汝が其の力の及ぶ限り法律及び全國家を破壊しようとするものではないか。凡そ其の國家の法律の裁判に何等の威力もなく、また私人がこれを侮蔑し、蹂躪するやうな國家が、而も尙能く國家として存立し、滅亡を免れることが出来るものであると汝は考へるか。」と問うたならば、クリトーンよ、我等は之に對して何と答ふべきであるか。

と云ひ、尙之に次いで、國家及び法律を擬人して問を設け、國法の重んずべきこと、又一私人の判斷を以て之に違背するは即ち國家の基礎を覆さんとするものであるといふことを論じ、更にクリトーンに向つて、

我等は之に答へて、然れども國家は已に不正なる裁判を爲して余を害したり。」と答ふべきか。

と云ひ、クリトーンが
勿論です。

と云つたのに對して、
然らば、若し法律が「ソクラテスよ、これ果して我等と汝と契約した所のものであるか。汝との契約は、如何なる裁判と雖も國家が一度之を宣告した以上は、必ず之に服従すべしとの事ではなかつたか。」と答へたならば如何に。

と云ひ、更に又假令惡しき法律にても、誤れる裁判にても、これを改めざる以上は、之に違反するは、徳義上不正である所以の理を

説破し、尙進んで、

凡そアテネの法律は、苟くもアテネ人にして、これに對して不
満を抱く者あらば、其の妻子眷族を伴なうて、何處へなりとも
その意に任せて立去ることを許して居るではないか。今、汝
はアテネ市の政治法律を熟知しながら、猶此の地に留つて居
るのは、即ち國法に服従を約したものであるではないか。かゝる黙
契を爲しながら、一たび其の國法の適用が、自己の不利益とな
つたからと云つて、直に之を破らうとするのは、抑も不正の企
てはあるまいか。汝は深くこのアテネ市を愛するがために、
これまでこの土地を離れたこととは唯一度イストモスの
名高き競技を見るためにアテネ市を去つたのと、戦争の爲に
他國へ出征したこととの外には、國境の外へは一足も踏出し

イストモス

Isthmus

コリント地峽に
ある
イストモス祭は
ギリシヤ四大大國
民祭の一で二年
毎に行はれた

たことはなく、彼の跛者盲人の如き不具者よりも尙他國へ赴
いたことが少かつたのではないか。かくの如きは、これ即ち
アテネ市の法律との契約に満足して居つたことを明らかに
立證するものではあるまいか。且又此の默契たるや、決して
他より壓制せられたり、欺かれたり、又は急遽の間に結んだも
のではないのであつて、若し汝がこの國法を嫌ひ、或はこの契
約を不正と思うたならば、このアテネ市を去るためには、既に
七十年の長年月があつたではないか。それにも拘らず、今更
國法を破らうとするのは、これ即ち當初の默契に背戻するも
のではないか。
と云うて、縷々自己の所信を述べ、
故にかゝる契約を無視すれば正義を如何にせん、天下後世の

識者の嗤笑を如何にせん。若しクリトーンの勸説に従つて、脱獄するやうなことがあれば、これ即ち悪例を後進者に遺すものであつて、却つて彼は青年の思想を惑亂する者であると云ふ誹毀者等の偽訴の眞事であることを自ら進んで表白し、證明するやうなものではないか。

と云ひ、更に

正義を忘れて子を思ふことなかれ。正義を後にして生命を先にすることなかれ。正義を輕んじて何事をも重んずることなかれ。

と説き、滔々數千言を費して、丁寧親切にクリトーンに對つて、正義の重んずべきこと、法律の破るべからざることを語り、よりにて脱獄の非を教へ諭したので、流石のクリトーンも終に辭な

くして、この大聖の清説に服してしまつたのである。(法窓夜話)

四 いさよふ月

阿 佛 尼

阿佛尼
歌人
藤原爲家の妻
藤原爲相の母
弘安六年(九四三)歿
年未詳
書の名
古文孝經

むかし、壁の中より求め出でたりけむ書の名をば、今の世の人の子は夢ばかりも身の上の事とは知らざりけりな。水莖の岡の葛葉かへすくも書きおく跡たしかなれども、かひなきものは親のいさめなり。また賢王の人を捨てたまはぬ政にも漏れ、忠臣の世を思ふ情にも捨てらるゝものは、數ならぬ身ひとつなりけりと思ひ知りながら、またさてもあらで、猶この愁こそやるかたなく悲しけれ。

更に思ひつゞくれば、やまとうたの道は、たゞ實少く、あだなるしさびばかりと思ふ人もやあらん。日本の本國に、天岩戸開けし

時、よもの神たちの神樂の詞をはじめて、世を治め、物をやはらぐ
る媒となり、にけるとぞ、この道のひじりたちは記し置かれたり
ける。

二たび勅を受けて
阿佛尼の夫爲家勅命
をうけて續後撰集と
續古今集を撰した
三人

爲顯
爲相
爲守

細川
播磨國美養郡細川庄

さてもまた集を撰ぶ人はためしおほかれど、二たび勅を受けて
世々に聞えあげたるは、類なほありがたくやありけん。その後
にしもたづさはりて、三人の男子ども、百千の歌の古反故どもを、
いかなるえにかありけん、あづかり持たることあれど、道をたす
けよ、子をはぐくめ、後の世をとへとて、深き契をむすびおかれし
細川の流も、故なくせきとめられしかば、跡とふ法の燈火も、道を
守り、家をたすけん親子の命も、もろともに消えをあらそふ年月
を経て、あやふく心細きものから、何としてつれなく今日までは
ながらふらん。惜しからぬ身ひとつは、やすく思ひ捨つれども、

子を思ふ心の闇
人の親の心は闇にあ
らねども子を思ふ道
に惑ひぬるかな
(藤原兼輔)

行き憂し
人やりの道ならなく
に大方は行きうしと
いひていざ歸りなむ
(古今集・源さね)

侍従
爲相
大夫
爲守

子をおもふ心の闇は猶しのび難く、道をかへりみる恨はやらん
かたなく、さてもなほ東の龜の鑑にうつさば、くもらぬ影もや顯
るゝと、せめて思ひあまりて、萬のはぐかりを忘れ、身をえうなき
ものになし果てて、ゆくりもなくいさよふ月にさそはれて出で
なんとぞ思ひなりぬる。
頃はみ冬立つはじめの定めなき空なれば、降りみ降らずみ時雨
もたえず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙とともに亂れ散りつゝ、事に
ふれて心細く悲しけれど、人やりならぬ道なれば、行き憂しとて
も止るべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。
めかれせざりし程だに、荒れまさりつる庭も籬も、ましてと見ま
はされて、慕はしげなる人々の袖の雫も、慰めかねたる中にも侍
従、大夫などの、あながちに打屈じたるさま、いと心ぐるしければ、

兼好法師

室町時代の文學者
正平五年(1320)寂
年六十八

物のあはれ
春はたゞ花のひとへ
にさくばかりもの
あはれは秋ぞまされ
る(拾遺集讀人不知)

さまざまに言ひこしらへぬ。(十六夜日記)

五 四時のあはれ

兼好法師

折節の遷り變るこそ物ごとにあはれなれ。「ものあはれは秋こそまされ」と人ごとにいふめれど、それもさるものにていま一きは心も浮立つものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲などこの外の外に春めきて、のどやかなる日影に垣根の草萌出づることより、やゝ春深く霞み渡りて、花もやう／＼けしきだつほどこそあれ、折しも雨風打續きて、心あわた／＼しう散りすぎぬ。青葉になりゆくまで、萬づにたゞ心をのみぞ悩ます。花橘は名にこそ負へれ、猶梅の匂にぞ、いにしへの事も、たちかへりこひしう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなき様したる、すべ

花橘

さ月待つ花橘の香を
かげば昔の人の袖の
香ぞする(古今集讀
人不知)

て思ひすてがたきこと多し。

灌佛

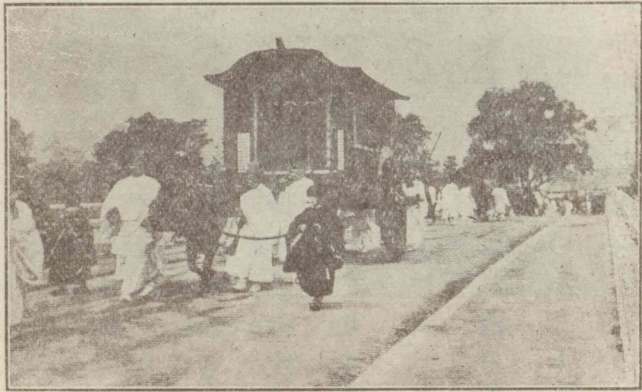
四月八日の佛生會

祭

賀茂の葵祭
四月の中の酉の日
今は五月十五日

六月祓

六月の晦日に行はれ
る大祓の神事



(車所御)祭

葵

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂りゆく程こそ世のあはれも人の戀しさもまされ。「と人の仰せられしこそげにさるものなれ。五月、菖蒲葺く頃、早苗とる頃、水雞の叩くなど心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。

うやう夜寒になる程、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づく頃、早稻田

五 四時のあはれ

思しき事
おぼしき事いぬは
げにぞはらふくる
こちしける(大鏡)

佛名
十二月十九日から三
日間宮中て行はれる
佛事
諸佛の名號を稱へて
罪障を懺悔する法會
荷前の使
年の暮に諸國から奉
る貢の初穂を十陵八
墓に奉られる使

刈りほすなど、取集めたる事は秋のみぞ多かる。又野分の朝こそをかしけれ。言續くれば、皆源氏物語枕草子などにことふりにたれど、同じ事また今更に言はじともあらず。思しき事言はぬは腹ふくる、業なれば筆に任せつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやりすつべきものなれば、人の見るべきにあらず。さて、冬枯の景色こそ秋にはをさゝ、劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白う置けるあした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて、人毎にいそぎあへる頃ぞまたなくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の寒けく澄める二十日餘りの空こそ心細きものなれ。御佛名荷前の使立つなどぞあはれにやむごとなき。公事ども繁く、春のいそぎに取重ねて催しおこなはるゝ様ぞいみじきや。追

追儼

十二月晦日の夜宮中
て疫鬼を追ひ拂はれ
る公事
四方拜
正月元日早旦天皇が
天地四方を拜し給ふ
式



(事行中年筆茶爲泉冷) 儼

儼より四方拜に續くこそ面白けれ。つごもりの夜いたう暗きに、松どもともして夜半過ぐるまで人の門叩き走りありきて、何事にかあらん事々しくのゝしりて足を空にまどふが、曉方よりさすがに音なくなりぬるこそ年の名残も心細けれ。亡き人の來る夜とて魂祭るわざは、此の頃都にはなきを、あづまの方には猶する事にてありしこそあはれなりしか。かくて明けゆく空の景色昨日に變りたりとは見えねど、引替へ珍しき心地ぞする。大路の様、松立てわたして、華やかに

嬉しげなるこそまたあはれなれ。(徒然草)

六 朝鮮の四季

遅塚麗水

遅塚麗水
文章家
名は金太郎
明治元年駿河沼津生



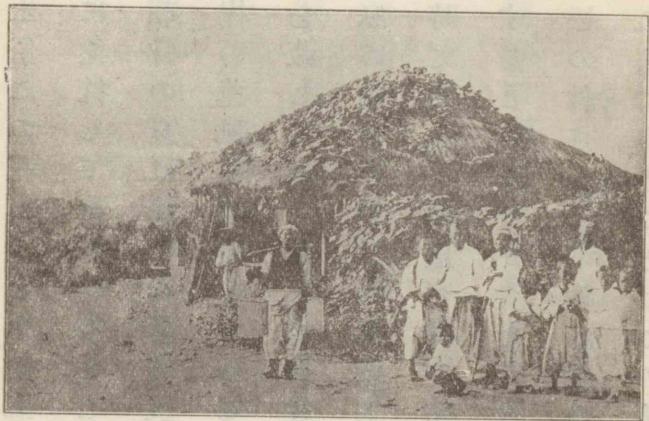
Canary
金絲雀
ケーナリ
アフリカの西北
海にあるカナリ
1島が原産地だ
といふ

朝鮮の春は、李の花でもなく、杏の花でもなく、梨の花でも、桃の花でもなく、無論櫻の花でもない。朗かに明るい鬱金の花をもつ連翹こそは、げに朝鮮の春を象徴する花である。京城なる李王家秘苑はいふまでもなく、通邑大都の門巷籬落、そこに黄金の色麗かな連翹の盈々たる細條、軽く軟風に吹きなびいて、嫩き春光に陶醉するやうな風情に見えることによつて、始めて春が来たといふ心を催させる。この國ではこの花を迎春花といふ。正しくその名にふさはしい。俗間ではケーナリと呼ぶ、その花の色が金絲雀に似てゐるので、しか呼ばれてゐるのであらう。

Poplar
ホブラ

金絲雀は徳川幕府の頃朝鮮の信使が携へ還つたものである。土俗、この花と葉とを胡麻油に漬けて、腫瘡や毒蟲にさゝれた時に塗抹して奇効があると傳へてゐる。朝鮮の夏は正に白楊の夏である。水村山郭、處として丈高き白楊の、薰風に嘯嗽してゐるのを見ないことはない。枝に鵲の巢を藏してゐるなどは、詩趣あり又畫趣ありといふべきである。私の始めて朝鮮に渡航したのは、三十餘年前、征清役に従軍した時である。何處へ行つても童山秃丘、絶えて樹らしい樹に逢着することはなかつたが、今來て見れば、到る處翠阜蒼丘、扶疎たる松の林さへ、その樹の既に拱するに餘りあるを見る。その白楊の殊に多きことは、この樹の成育、他の木に比すれば最も速に、五年にして屋根の垂木となすに足り、十年にして棟梁となすに堪

ふるに見て、併合當初の有司は特にこの木の栽植を奨励したものであらうと思はれる。



朝鮮の農家

照雲を爛らす時、水村山郭、一樣農家の屋根に乾されたこの蕃椒

秋の朝鮮は、正に蕃椒の秋と云ふべきである。金風郊墟に入るの時、一度城外におとづれると、村家の草葺屋根の上、殷紅、火よりもあかいこの蕃椒の一面に並べ乾されてあるを見る。支那人が韭、大蒜を嗜むがごとく、朝鮮人は更に尤も蕃椒を嗜む。料理にも香の物にも、この物なければ旨しとしない。落日、山にあり、反

紅酣し、殊燃ゆるの光景は、誠に綺麗なながめである。内地には昔、この物なく、この物あるは豊公の征韓役後より始るといふ。正しく出征の武士が、その種子を燧石袋の中に収めて持還つたものであらう。さればこれを唐辛といひ、更に又高麗胡椒ともいふ。昔、内地の飛脚が深雪のうちを行く時、この物を足袋のうちに入れて凍傷を防いだといふくらゐ、烈寒の地に生を寄せてゐる人たちは、この物を食うて寒氣を攘ふといふ自然の要求から、その嗜好を成したのであらうと思はれる。明治節時分になると、麥酒が凍つて罎が破裂するといふほど寒威の猛烈な朝鮮には、冬を象徴する何物をも持たないことは心寂しい。強ひてこれありとすれば、彼の温突である。李王家の宮殿は勿論、庶民の家にも必ずあつて、冬眠の人に煦々の春を輸

ベチカ
Pechka
ロシア式の暖爐

すのである。家の床はすべて泥土で築造される。その床を作らうとする當初から、螺線型に又山路形に、若しくは巴様に、三升形に、古來からの傳統や、自家の多年經驗し來つた工夫の施設のもとに、遍く床の面に温氣の行互るやうに竇道を設け、竇道の一端は、壁外の煙突に通じ、他の一端は土間に据ゑた竈の奥に連結させて置くのである。されば日夕炊爨するその火氣は、煙と共に榮螺の殻のごとき竇道を傳つて土床を温め、やがて層外の煙突より放散されるのである。床には煙の室内に漏出づるを防ぐ爲に紙をもつて目張をなし、その上に朝鮮油團を敷く。庶民の多くは褥も敷かず固き床の上に胡坐し、奇寒膚に砭するやうな冬の夜にも、一枚の煎餅蒲團、薄い小夜具の一襲を被つて臥すのみである。移住の内地人は、おほくは暖爐またはベチカを置

志賀矧川
地理學者
名は重昂
文筆に長ず
三河國岡崎生
昭和二年卒
年六十五



神仙爐

いて防寒の用意をなせど、中にはやはり朝鮮風の温突室も造つてゐる。京城その他都會の内地人向きの貸家は、その一室には必ず温突の設備があるやうになつたといふ。東京でも、曾て亡友志賀矧川氏が、代々木の邸の一室を温突式となし、年の暮、その温突開きの當夜、知人數輩を招いて朝鮮料理を饗應したことがある。私も亦招かれた客の一人であつたが、折からの微雪、窓邊の竹に洒いで、寒さの殊に酷だしい宵ではあつたが、坐間には唯喫烟用の煙草盆があるのみで、絶えて火氣のなかつたに拘らず、和やかな温氣は危坐の膝を暖めて、人をして覺えず睡を催さしむる美慵を感じた。さてくさくさの料理の出た後、最後の神仙爐を圍んだ時には、温か過ぎて、額に薄汗の泌み出づるを覺えたほどであつた。文筆に携はる人の讀書述作の室か、若しくは閑



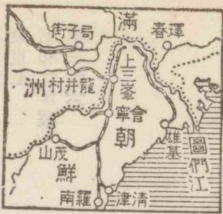
二百五十韓里
日本の二十五里

時閑客と面晤する閑房としては、誠に妙といふべきであるが、邦人の習慣より言へば、温突室には久しく居るべからざるものであらうと思ふ。鮮民の懶惰の習性は、或はこの温突あるが爲であらう。私は曾て平壤大戦を觀ての歸途、黄州から南首陽山を踰えて海州より汽船、仁川に歸つたことがある。當時年少、二百五十韓里を一日半をもつて踏破した。夜中、銀波の河を徒涉し、とある河畔の客舎を叩き、水に濡れた服をも脱がず、行旅の鮮人たちが雜然として枕藉してゐる温突の室に入つて、夜の明くる間の少睡を取つたが、やがて悪夢に魘はれたやうに驚き覺めると、さながら新たに蒸甑の中より出でたる甘藷のごとく、白氣濛濛として滿身より立昇り、流汗、膚に遍く堪ふべからざるの奇痒を覺えた。傍に臥してゐた鮮人たちも立騒ぐこの物音に夢を

兀良哈

明初の頃遼東に侵入して來た部族の名
こゝでは古へその部族のゐた土地のこと

龍井村附近



破られ、眼を睜つて訝りながめてゐるも道理こそ、濡れた衣服は温突の熱氣に蒸されてかくの始末となつたのであつた。今年の春の旅行にも、會寧より圖們江を渡りて龍井村を訪づれた時、春とはいへど胡沙吹く風のまだ寒い古兀良哈（ハカ）旅館の主人の親切から温突の室に幾夜を過したが、厚衾襲ねての夜半の夢は、吾が家に居る時のやうに圓かならず、襲ねた衾をはねのけて、僅かに一枚の小夜具を被つて辛うじて眠ることを得たこともある。しかも夜明けて後の心地は、何となく膾騰として、頭の岑々と痛むを覺えたのを見れば、温突はたしかに邦人の習性には適したものではあるまいと思ふ。さりながら、私は朝鮮の春と夏と秋とを知つて、未だ冬を知らない。寒威の酷しい朝鮮の、しかも彼の土壁、草屋、隙もる風の刀のごとき民家にあつては、この温突あ

つて始めて寒き夜を凍えずに過され得ることであらう。

〔滿鮮趣味の旅〕

七 蜜 柑

芥川龍之介

芥川龍之介
小説家
東京生
昭和二年歿
年三十六

プラットフォーム

Platform

或曇つた冬の日暮である。私は横須賀發上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり發車の笛を待つてゐた。とうに電燈のついた客車の中には、珍しく私の外に一人も乗客はゐなかつた。外を覗くと、うす暗いプラットフォームにも、今日は珍しく見送の人影さへ跡を絶つて、たゞ檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しさに吠立ててゐた。これらはその時の私の心持と、不思議な位似つかはしい景色だつた。私の頭の中には言ひやうのない疲労と倦怠とが、まるで雪曇りの空のやうなどんよりした影

ポケット

を落してゐた。私は外套のポケットへじつと両手をつつこんだまゝ、そこにはいつてゐる夕刊を出して見ようといふ元氣さへ起らなかつた。

やがて發車の笛が鳴つた。私はかすかな寛ぎを感じながら、後の窓枠へ頭をもたせて眼の前の停車場がずる／＼と後ずさり始めるのを待つともなく待ちかまへてゐた。ところがそれよりも先にけたゝましい日和下駄の音が、改札口の方から聞え出したと思ふと、間もなく車掌の何か言罵る聲とともに、私の乗つてゐる二等室の戸ががらりと開いて、十三四の小娘が一人慌しく中へはいつて來た。と同時に一つづしりと揺れて、徐に汽車は動き出した。一本づつ眼をくぎつて行くプラットフォームの柱、置忘れたやうな運水車、それから車内の誰かに祝儀の禮

を言つてゐる赤帽——さういふすべては、窓へ吹きつける煤煙の中に、未練がましく後へ倒れて行つた。私は漸くほつとした心持になつて、巻煙草に火をつけながら、始めて懶い臉をあげて、前の席に腰を下してゐた小娘の顔を一瞥した。それは油氣のない髪をひつつめて銀杏返しに結つて、横なでの痕のある輝だらけの兩頬を氣持の悪い程赤くほてらせた、如何にも田舎者らしい娘だつた。しかも垢じみた萌葱色の毛絲の襟卷がだらりと垂下つた膝の上には、大きな風呂敷包があつた。その又包を抱いた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事さうにしつかりと握られてゐた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかつた。それから彼女の服裝が不潔なものやはり不快だつた。最後にその二等と三等との區別さへも辨へない愚

鈍な心が腹立たしかつた。だから巻煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいと云ふ心持もあつて、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上にひろげた。すると其の時夕刊の紙面に落ちてゐた外光が、突然電燈の光に變つて、刷の悪い何欄かの活字が意外な位鮮かに私の眼の前へ浮んで來た。言ふまでもなく汽車は今、横須賀線に多い隧道の最初のそれへはいつたのである。しかしその電燈の光に照らされた夕刊の紙面を見渡しても、やはり私の憂鬱を慰むべく、世間は餘りに平凡な出來事ばかりで持ちきつてゐた。講和問題、新婦新郎、瀆職事件、死亡廣告——私は隧道へはいつた一瞬間、汽車の走つてゐる方向が逆になつたやうな錯覺を感じながら、それらの索然とした記事から記事へ

殆ど機械的に眼を通した。が、その間も勿論あの小娘が、恰も卑俗な現實を人間にしたやうな面持で、私の前に坐つてゐる事を絶えず意識せずにはゐられなかつた。この隧道の中の汽車と、この田舎者の小娘と、さうして又この平凡な記事に埋つてゐる夕刊と、——これが象徴でなくて何であらう。不可解な、下等な、退屈な人生の象徴でなくて何であらう。私は一切がくだらなくなつて、読みかけた夕刊を抛り出すと、又窓枠に頭をもたせながら、死んだやうに眼をつぶつて、うつら／＼し始めた。それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かに脅されたやうな心もちがして、思はずあたりを見まはすと、何時の間にか例の小娘が向ふ側から席を私の隣へ移して、頻に窓を開けようとしてゐる。が、重い硝子戸はなか／＼思ふやうに上らないらしい、

あの輝だらけの頬は愈、赤くなつて、時々鼻涙をすゝりこむ音が、小さな息の切れる聲と一緒に、せはしく耳へはいつて来る。これは勿論私にも、幾分ながら同情を惹くに足るものに相違なかつた。しかし汽車が將に隧道の口へさしかゝらうとしてゐる事は、暮色の中に枯草ばかり明るい兩側の山腹が、間近く窓際に迫つて來たのでも、すぐに合點の行く事であつた。にも關らずこの小娘は、わざ／＼しめてある窓の戸を下さうとする。——その理由が私には呑みこめなかつた。いやそれが私には、單に小娘の氣まぐれだとしか考へられなかつた。だから私は腹の底に依然として險しい感情を蓄へながら、あの霜焼けの手が硝子戸を擡げようとして、惡戦苦闘する様子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るやうな冷酷な眼で眺めてゐた。すると

間もなく凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けようとした硝子戸は、とう／＼ぱたりと下へ落ちた。さうしてその四角な穴の中から、煤を溶したやうなすす黒い空氣が、俄に息苦しい煙になつて、濛々と車内へ流れ込んだ。元來咽喉を害してゐた私は、手巾を顔に當てる暇さへなく、この煙を満面に浴びせられたおかげで、殆ど息もつけない程咳きこまなければならなかつた。が小娘は私に頓着する氣色も見えず、窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を戦かせながら、じつと汽車の進む方向を見やつてゐる。その姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る見る明るくなつて、そこから土の匂や枯草の匂や水の匂が冷やかに流れこんで來なかつたら、漸く咳きやんだ私は、この見知らな

い小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り戸をしめさせたのに相違なかつたのである。しかし汽車はその時分には、もうやす／＼と隧道を迂りぬけて、枯草の山と山との間に挟まれた或貧しい町はづれの踏切にさしかゝつてゐた。踏切のちかくには、いづれも見すばらしい藁屋根や瓦屋根がごみ／＼と狭苦しく並んで、踏切番が振るのであらう、唯一旒のうす白い旗が懶げに暮色を揺つてゐた。やつと隧道を出たと思ふ——その時その蕭索とした踏切の柵の向ふに、私は頬の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立つてゐるのを見た。彼等は皆、この曇天に押しすくめられたかと思ふ程、揃つて脊か低かつた。さうして又この町はづれの陰慘たる風物と同じやうな色の着物を着てゐた。それが汽車の通るの

を仰ぎ見ながら、一齊に手を舉げるが早いか、いたいけな咽喉を高く反らせて、何とも意味の分らない喊聲を一所懸命に迸らせた。するとその瞬間である。窓から半身を乗りだしてゐた例の娘が、あの霜焼けの手をつとのぼして、勢よく左右に振つたと思ふと、忽ち心を躍らすばかり暖な日の色に染まつてゐる蜜柑が凡そ五つ六つ、汽車を見送つた子供たちの上へばら／＼と空から降つて來た。私は思はず息を呑んだ。さうした刹那に一切を了解した。小娘は、恐らくこれから奉公先へ赴かうとしてゐる小娘は、その懷に藏してゐる幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切まで見送りに來た弟たちの勞を報いたのである。暮色を帯びた町はづれの踏切と、小鳥のやうな聲をあげた三人の子供たちと、さうしてその上に亂れ落ちる鮮かな蜜柑の色と、

すべては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ない程はつきりと、この光景が焼きつけられた。さうしてそこから、或得體の知れない朗かな心もちが涌上つて來るのを意識した。私は昂然と頭を擧げて、まるで別人を見るやうにあの小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に歸つて、相變らず輝だらけの頬を萌葱色の毛絲の襟卷に埋めながら、大きな風呂敷包を抱へた手に、しつかりと三等切符を握つてゐる。……

私はこの時始めて、言ひやうのない疲勞と倦怠とを、さうして又不可解な下等な退屈な人生を僅かに忘れる事が出來たのである。(芥川龍之介全集——影燈籠)

岡倉覺三
美術鑑賞家

東京美術學校長

江戸生

大正二年卒

年五十二

五欲
眼耳鼻舌身よりおこ

る欲

大士

觀音菩薩

八 狩野芳崖

岡倉覺三

一幅の濃淡、人天相分る。上は則ち無量光明の淨界なり、下は則ち五欲昏迷の穢土なり。大士の容顏端嚴にして、愁に和して微笑を含み、左手に楊柳を撚し、右手に寶瓶ほうびやうを傾け、瀉ぎ來る無明空中一滴慈悲の水は清魂の人間に歸るを送るものなり。赤子の合掌して仰いで菩薩を見るものは、無知清淨にして餘念を懷かず。亂山突兀、暮雲暗澹、煙冷やかに風荒る。憐むべし、呱呱たる阿孺何處にか墜下し去りて、憂悲煩惱の長夜に迷ひ、那邊の淨池に向つて如意心蓮を發き、再び慈悲の海に遡るを得ん。嗚呼、是芳崖狩野翁が畢生の傑作觀音大士の像なり。翁嘗て人に語つて曰く、「人生の慈悲は母の子を愛するに若くは

なし。觀音は理想的の母なり、萬物を發生煦育する大慈悲の精神なり、創造化育の本因なり。余此の意象を描かんと欲する、ここに年あり。未だ適當なる形相を得ず」と。

此の圖は翁が最終の揮毫に係り、長逝に先だつこと僅かに四日、畫き了へて、未だ款を署するに至らざりしものなり。蓋し翁平生の心事此の一幅畫中に留存するものあらん。其の筆墨の沈著醇厚にして、其の賦色の明麗渾融なるは近世多く比類を見ず。特に意匠の高尙秀絶なるに至りては、技、道に進むものにして、遙かに古人を凌駕せんとす。尋常一様、墨を玩び筆を弄し、花天月地に風流三昧を事とするものと時を同じうして語るべからず。彼のミケランジェロの畫きたる創造の圖クリエイションは歐洲美術の神品と稱すべく、氣力豪邁にして布置雄大、唯見る雲間の上帝隻手を伸

Michaelangelo
(1475-1564)

ミケランジェロ

文藝復興期の
伊太利の大藝
術家

して大地を指し、倏忽一箇の壯士を現出するを。彼は則ち上帝の命令念力を以て人を創造するなり。是は則ち觀音の慈悲法力を以て人を發育擁護するなり。佛家發生の深理は自ら基督教物の大旨と異なる所あり、其の美術上の形相も亦随つて同じからず。人若し畫中の心情を看破し去らば、豈妙悟の天外より落つるなからんや。憐むべし、此の超凡の絶技を抱きたる人は、未だ天下に名を成す能はずして空しく黄泉の客となれり。然れども翁の妙想は竟にミケランジェロをして美を擅にせしめざりしなり。



狩野芳崖

翁姓は狩野、文政十一年正月十三日、長州に生る。幼名幸太郎。父を晴皐と曰ふ。家世、萩藩の畫師たり。父、性剛毅にして俠氣あり。自ら信ずること頗る固く、其の子を訓ふること甚だ嚴正なり。翁が勇邁果敢の氣力は多く嚴君の鍛鍊による。母、溫柔貞淑、其の愛育慈養は翁の常に追念したる所にして、後年觀音の畫ある所以も亦此に基づく所あるべし。翁の豪懷英氣、風雲を叱咤する筆を以て、時として情致纏綿、曉露の海棠に墜つるが如き一種幽婉の變體あらしめたるも亦故ありと謂ふべし。年十九にして始めて江戸に來り、木挽町狩野畫所に入る。爾來十有餘年、螢雪の功を積み、狩野門流の正格を練磨し、非凡の精妙を顯し、當時秘訣と稱したる師門の口傳の如きも、暗合默會して先輩を驚かし、巍然として畫所屈指の名手たり。安政六年江戸

木挽町
江戸木挽町
狩野四家の一
狩野
狩野古法眼元信以來
徳川幕府畫所預とな
る
室町幕府以來の畫師

周文

室町時代の畫僧京都の相國寺に居た

玉澗

支那南宋の畫僧若芬の號

夏明遠

支那南宋の畫家

仇英

支那明代の畫家

雪舟

室町時代の畫僧

馬遠

支那南宋の畫家

夏珪

南宋の畫家

相阿彌

室町時代の畫家

城本丸焼失す。再建に當り、大廣間天井の裝飾は翁選ばれて之を託せらる。然れども翁の心は未だ大いに安んぜざるものあり、一朝自ら悟る所ありて、遂に別天地を開かんとするに至れり。當時狩野の畫風漸く衰微に瀕し、粉本摸寫の弊最も盛にして、周文の遠山に玉澗の雁陣を横たへ、夏明遠の樓閣に仇英の人物を坐せしめ、以て自家の製作となす者あり。當時の一幅の丹青を解剖し去らば、雪舟の樹木巖石、馬遠の蘆荻流水、夏珪の牧牛、相阿彌の歸帆を點々排列するに過ぎず。畫家の新案に係るものは纔かに雲煙と落款とのみ。翁の洞然大觀して自ら破格を企てたるは洵に已むを得ざりしなり。一日童子あり、戲に虎を描く。眼は是兩々の丸子、耳は是雙々の遠山、足は是四竿の老竹、斑文五六點、鬚毛兩三絲、添ふるに長大の尾を以てす。翁觀て大いに喜

雪村

室町末期の畫僧

橋本雅邦

畫家

東京美術學校教授

明治四十一年卒

年七十四

び、起舞して歎じて曰く、是なる哉、是なる哉。雪舟の骨、雪村の氣亦之に外ならず。畫の要は一意直到、唯心裏の影を以て紙上の形となすに在り。意盡くる所は則ち筆の盡くる所なり。氣力満盈の間、豈一點の間筆を着くべけんや」と。是よりして筆墨を童子に與へ、白紙を以て其の畫く所に換へ、之を祕笈に藏し、夜靜かに人定まる後、孤燈を剪つて之を展覽し、畫中の上乘禪に悟入する所あり。此の時に於て翁の心事を解し、共に破格を期したるは、獨り橋本雅邦氏なりき。氏は翁と同日畫所に入る、時に年十三歳なりと云ふ。此の兩畫伯、一は雄拔奇豪、一は渾厚着實、共に表裏提挈し、新畫の端緒を開きたるは亦奇緣といふべし。心機漸く熟して、形相未だ成らず。新に生面を開きたる者の通弊として、忽ちにして奇僻に陥り、怪詭百出、滿幅の風雲魑魅魍魎

を奔らせて同門の嘲を招き、師家の罵に遭ひぬ。されど、翁自ら信ずる所あり、敢へて一步を退かさざりき。憾むらくは世を擧つて俗陋、翁を知る者甚だ稀なり。慘澹辛苦嘗めざるなく、其の死に先だつこと兩三年、始めて其の心機と形相と相調和するを得て、畫法の自在を成したるもの如し。觀音其の他の傑作に至りては畫格遠く古大家に入り、人をして驚絶せしむるに足ると雖も、其の巧妙は既成の形相に非ずして、寧ろ含蓄にあり、未敷蓮華の香を含み、秋雲の雷電を藏するが如し。惜しいかな、未だ大いに其の圓熟縱横の妙を揮ふに及ばずして逝く、年六十一。時に明治二十一年十一月五日なり。翁人となり、内、忠實溫順にして、外、高邁俊逸なり。其の父母に至孝なるは郷閭の知る所にして、勝川門下に遊學したる時の如き

勝川
狩野勝川院雅信
木挽町狩野畫所の八
世
江戸の人
明治十三年歿
年五十八

は一身節儉を守り、潤筆を得ても之を私せず、郷里に送り、以て父母晨夕の料に供したりと云ふ。技藝の上に在りては虚心坦懐、好んで人に問ひ、門下子弟の説と雖も、苟も取るべきあれば、喜び拜して之を容れ、其の圖様を改むること屢なり。其の自ら信じたる所を説くに至つては、貴賤親疎の別なく、長談雄辯して必ず意を盡くさざれば已まず。翁又謠曲を愛し、舞を好む。常に舞法の畫法と同一なる所以を説き、得意の事得意の人に遇へば、娑娑として起舞し、旁に人なきが若し。蓋し畫伯眼中唯畫あるのみ。顧ふに美術の大家たるものは自ら一家の美學を有するものなり。或は心に感じて口に之を言ふ能はざるものあり。或は默契して言ふを好まざるものあり。翁の如きは之を言ふを喜びたるものなり。翁は畫理を以て天地萬物の眞理を發明せ

んと試み、佛家禪僧の妙悟、漢儒西哲の深旨、總べて丹青鏡裏に照映して其の意義を判し、得失を論じ、仁義道德の大道、坐臥進退の庸行に至るまで、悉く取りて以て畫訣とせり。翁常に言ふ、人生各自獨立の宗教なかるべからず。美術家の宗教は美術宗あり。復何ぞ之を他に求めんや。と。亦以て其の造詣を見るに足るべし。(天心全集—國華)

九 梁川星巖の家

三 浦 耀

誰しも昔住んだ家は懐かしく思ふであらう。それも大きくなつてから住んだ家よりも、子供の頃、遊んで暮した家に一層の物懐かしさを覚えるのである。私は十幾年かの後に再び生れ故郷の京都に戻つて、時折、昔の住居の邊をさまよつた。それは丸

三浦耀

建築家

工學博士

京都帝國大學教授

京都市生

昭和六年歿

年四十一

梁川星巖

江戸末期の詩人で勤

王家

美濃に生れ京都に住

んだ

安政五年卒

年七十

丸太町橋

京都御所の前通を東

へ鴨川に架した橋

太町橋の東の袂を少し上つた川沿の處であるが、私の生れたその家は既に跡方もなくなつてしまつた。それでも昔ながらの榎の老樹が二三本そのまま、路傍に残つて居る。それには六七歳の自分が登りは登つたがさて下りることがむつかしくて泣かんばかりの努力を以て一所懸命やつと下りて來た思出がある。棟の大木も一二本あつて、晩春の夕方など其の小さい薄紫の花が、高い空からくるく廻りながら靜かに下の小川に流れ込むのであつた。小川といふは鴨川の上流で、少し上手では牛の遊ぶ野原を通り、黄色い實を持つ芭蕉や、木槿や、枳殻などの垣根の側を過ぎ、またことくと水車を廻したりして居たものだが、そんな面影はもう少しも見られない。

私は、去年の暮、大學病院へ行つた歸りに、やはり昔を偲びながら、

又その邊を通り過ぎた。その時ふと其處に「梁川星巖邸趾」といふ小さな石標を見出した。それが私に異常な感激を與へたのである。自分の生れた家、そして七歳までを遊び過し、又その後



梁川星巖

十七八の頃を二年ほど住みなじんだその家は、確に星巖がその晩年を送り、そして靜かに死んだ彼の鴨沂小隠であつたのだ。さうすればあの仄暗い八疊の間では、彼はきつと頼三樹三郎や梅田雲濱等と膝を交へて會談したことであらう。彼の妻の紅蘭もあゝいふ女丈夫であればその席に侍したこともあらうか。それならば佐久間象山が紅蘭を音づ

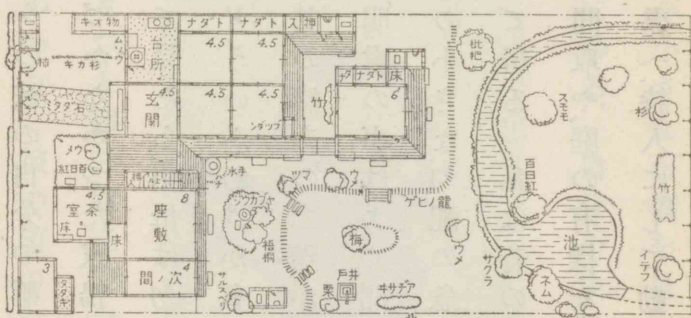
紅蘭
江戸末期の畫家、詩人
梁川星巖の妻
明治十二年歿
年七十六

アンデルセン
(1805—1875)
デンマルクの
童話作家

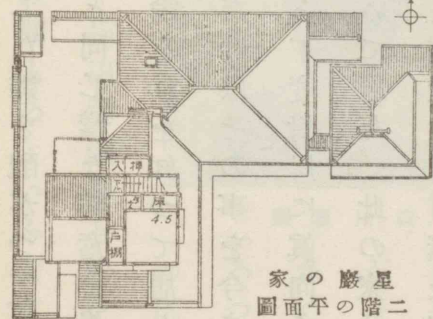
山陽
江戸後期の詩人で歴史家
名は襄
大阪に生れ京都に住んだ
天保三年(西九)卒
年五十三
山紫水明處
京都市上京區三本木町

れたのもきつと彼の家であつたに相違ない。私はアンデルセンの彼の自分の孵した雛を醜がつて、それが白鳥であるのに氣づかなかつた家鴨と同じ様な興奮を覺える。私は祖母に尋ねて見たら、祖母は勿論それを知つて居た。

どういふわけか私だけはその事を今まで全く知らなかつた。其の癖あの二階から丁度對岸に眞向きに見えた山陽の山紫水明處の事はよく聞いて居た。此の家は今でも鴨川の西岸に、其の小さな勾配の急な藁屋根の質素な姿を、昔ながらに水に浮べて居る。私は昔の思出の頁をめくりめぐつて、私の生れた家の間取や、庭の有様などを繰返し胸に浮べて見た。そして其處此處へ、詩人にして勤王の志士たる星巖や、畫人にして學者であつた紅蘭の姿を立たせて見る事に異常な興味を覺えて來た。そ



星の階の平面図
一 つた。



星の階の平面図
二

て居たのを、祖父は修理したり、又建増したりした。表には白壁

してとう／＼此の想像圖を紙の上に建てて見ようと思ふに至

この由緒ある家を紅

蘭の歿してのち、直に

買取つたと思はれる

人から、明治十八年に

私の祖父は更に買受

けたのである。その

時家はひどくいたん



星の廳の南面より見たる圖

ら植ゑたのかも知れぬ。あの前の往來は牛車が盛に通つて埃

の塀があり、之に古風な邸門が附いて居たのを、後に冠木門に直

した。庭にあつた池もその後埋めたし、處々に

梅などを植ゑたり、前栽に燈籠を置いたりした。

こゝではそれらを取除いて、元の通りと思はれ

るだけに組建てて見た。それがこの平面圖で

ある。

門を入つてすぐ左手に柿の木があつて、往來か

らよく見えた。これは蒔柿であつたが、よく實

のつた。多分元からあつたであらう。都會で

は珍しい事で、往來の人が褒めて通つた。塀の

外には低い枳殻の垣根があつたが、これは後か

がひどいので、その葉はいつも白くなつていぢけて居た。それ
はとにかくまづ玄關に案内しよう。四疊半の玄關には長い杵
石があつて、その左は袖隠しになり、胸の高さまでは白壁であつ
た。玄關と奥の間との間は二枚の腰高障子で仕切られ、それに
は坐つて眼の高さが幅の廣い無雙になつて居た。さて私ども
は右手の次の間へ入る。こゝは板の間で、階段室を兼ねて居る。
前栽の窓をうけて明るい室であつた。階段は稀な緩やかな勾
配で、ことに踏面は上下重つて居らず、まことに上りよく出來て
居た。それに二階に高窓をとつて光線を導いて居るので、階段
は十分明るかつた。朝早くこの高窓から日の光が階段の絨毯
の上に落ちた。尙、階段の下は全部、抽出しになつて居た。
この階段室から右の方は一段高くなつて居て、次の八疊の間に

入るには前を通つても後を通つても必ず一段上らなければな
らない。これは誠に不便であるが、その爲に座敷が一段高く上
座の様な一種の威嚴が感ぜられぬでもなかつた。ではこれか
ら座敷へ通つて見よう。

座敷は東面して居るが、板庇が長く出て居るので室は薄暗い。
それに、前には梧桐の雙樹が軒近く繁つて居て、尙更暗さを増し
たであらう。桐の下には稍丈の高い石燈籠が一基、一叢の藪柑
子の間に立つて居た。この部屋は又おまけに天井が低かつた。
そしてそれはどういふわけか、紙張であつた。こゝは志士が相
會して密談した場所ではないかと思ふ。尙、庭に面して一段低
く濡縁がついて居た。その隣は次の間で、四疊、奥の水屋に續い
て居る。網代天井をもつた水屋から座敷の床の後を通つて逆

に茶座敷へ行つて見よう。こゝは北に山茶花の垣根を持つた小さな前栽に面し、飛石傳ひに門からも來られる。庭には百日紅と白梅が植つて居た。鼠色の壁をもつた天井の低い室であつた様に思ふ。これで一廻りしたから今度は階段から二階へ上らう。二階は四疊半であるが、東と南に小さな濡縁を持つ窓があり、西にも小窓があつて眺望は極めてよい。先づ東を見ると遙かに大文字山が眞正面に見える。惜しい事には後に出來た或教會の大屋根の爲、今ではこの方面の遠望はすつかり奪はれてしまつた。尙、左手には遠く比叡が見える。この室に居れば東山からほのぼの上る明月は自分の懐へ飛んで入る。秋は梧桐の葉陰の月をまともに見る事が出来る。星

大文字山
東山の續きて如意が
嶽のこと

巖や紅蘭はきつと此處で月光を浴びて詩を賦したであらう。南の窓は餘りいゝ眺望はなく、そこからは唯葦の波を眺めただけであるが、西の窓からは樟や棟の葉越しに鴨川を眺める。川を隔てて山陽の山紫水明處は指呼の間にある。夕暮になれば残陽が老樹の影を疊の上に投込むのもこの窓からだ。家の前の往來もすぐ眼の下にある。紅蘭は星巖の歿後幾度かこの窓に凭り、遙かに山陽の舊栖を眺めて亡夫を思ひ起した事であらう。それでは又階段を下りて奥の方へ進まう。奥に入る縁側の曲角では大きな石の手水鉢が先づ眼につく。奥には四つの四疊半が背中合はせに並んで居る。これは茶の間と臺所と主婦室などである。こゝから一間の渡廊下を経て、

六疊の離れに續く。此の離れは日當りが大變よく理想的の隠居部屋である。それに庭の眞中に突出て居て、花や青葉の眺を恣にすることが出来た。閑靜で日當のよい事から考へて、私はこれが紅蘭の臨終の室でなかつたかと想像して居る。或は星

筆蹟
今來古往事茫茫、石馬聲ナク坏上荒レタリ、春ハ櫻花ニ入りテ滿山白シ、南朝ノ天子御魂香シ、草莽ノ臣子緯

今來古往事茫茫、石馬聲ナク坏上荒レタリ、春ハ櫻花ニ入りテ滿山白シ、南朝ノ天子御魂香シ、草莽ノ臣子緯

筆蹟星川梁

巖もこゝで長逝したのかも知れない。今度はこゝから

庭下駄をはいて庭へ下りて見よう。こゝで先づ昔からあつたと思はれる樹々を數へて見ると、池の畔の百日紅に、合歡の樹。百日紅はすべて三本、赤、白、薄桃と皆色がちがつて居た。北によつて大きな枇杷の樹が一本。池を越して向ふには一叢の竹が

あつた。多分これであらう、紅蘭は詠じて居る。

十二月念日早く起きて鶯を聞く

春意纒かに生じて猶未だ成らず。

曉寒惻々として半ば陰晴なり。

澁喉愛す汝が先づ氣を迎ふるを。

竹裏の雛鶯一兩聲。

その外杉の木は五六本もあつた。裏の方の杉には凌霄花がまつはつて、紅黄色の花を高く空にさゝげて居たものだ。また東南の隅には銀杏樹が一本、それでも十分秋を賑はした。これらのうち二三本は、今でもあとに建てた六軒の借家の庭の中に、そのまゝ寂しく突立つて居る。その他、杏、芙蓉、これらは共に彼女の詩の中に出て来る。又櫻、こゝめ櫻、栗、松、梅、梅はかれこれ

筆蹟

幽居偏ニ喜テ佳友ノ多キヲ。豈ニ音ニ丈人素襟ヲ同ジウスルノミナランヤ。脩竹團圓君子ノ節。芳蘭窈窕美人ノ心。蕪詞讒堂ノ爲ニ壽ヲ爲ス。孟緯。人有リ裁リ用ヒテ長運ヲ爲ル。又發ス驚龍裂石ノ聲。三樹節錄



(筆史女蘭紅) 圖石竹

七本ばかりあつた。これは私の祖父が梅好きであつたので、後から植ゑたのが多いだらう。けれども星巖の詩や紅蘭の詩にも梅が屢、詠みこまれて居る所を見ると、その内の數本は元からあつたものと思つた。池は裏通りの小川から水を引いて、庭の北隅から取入れ、南隅からやはり同じ小川へ流れ出た。この小川も今は水もない小溝に過ぎないが、昔は清い水が流れて、私どもが飛越えられぬ程の廣さであつた。池の中央には一間程の石の橋があり、池には祖父

が大きな鯉を放つた。星巖の時分はどういふ風であつたか。でも詩稿の中に池を詠んだものもあるから、元からあつたものであらう。南の境に紫陽花の一叢の側に石の井戸があつて清い水と與へてくれた。覗き込むと雪の下が揺れて居た。こゝから少し離れて繩暖簾のかゝつた風流な便所もある。その邊一面に龍の髯が繁つて居た。それから座敷の前の二本の梧桐は昔からあつたものと思はれるのに、詩人の詩の中に之を詠じたものが見當らぬのはどういふわけか。あれ程大きく美しい桐を詩人が見逃すことはあるまいと思ふに。さて、家の南の露路を脱けて表へ出ようとするに、長屋につき當る。それを右へ折れると門の横の柿の木が眼に入り、これで又

元の入口へ舞戻つたわけである。總じて鴨沂小陰集にも、又紅蘭の芙蓉鏡閣集にも「貧居」といふ事がよく出て来る。勿論、詩を賣つて生活し、しかも彼自ら言ふ如く柴門を鎖して幽居して居た有様で、富有でなかつたことは想像されぬでもない。紅蘭の詩に、

春夕絶句

閨窓人靜かにして夜風清し。

春は海棠に到りて殊に情有り。

一笑す貧居出づるに燭無きを。

他の明月を倩うて庭を照らして行く。

等いふのがある。(建築風景)

遍昭

俗名長峰宗貞

平安時代の歌僧

寛平二年(五〇)寂

年七十五

凡河内躬恆

平安時代の歌人

古今集撰者の一人

初瀬

奈良縣磯城郡初瀬町

長谷寺

紀貫之

平安時代の歌人

古今集撰者の一人

天慶九年(二六〇)卒

年六十五

紀友則

平安時代の歌人

古今集撰者の一人

貫之の従兄

一〇 山路の菊

西大寺のほとりの柳をよめる

僧 正 遍 昭

あさみどり糸よりかけて白露を玉にもぬけるはるの柳か

春の夜、梅の花をよめる

凡河内躬恆

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るゝ

初瀬に詣づるごとに宿りける人の家に久しく宿

らで程へて後に到れりければかの家のあるじか

く定かになむやどりはあるといひいだして侍り

ければそこに立てりける梅の花を折りてよめる

紀 貫 之

人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香ににほひける

櫻の散るをよめる

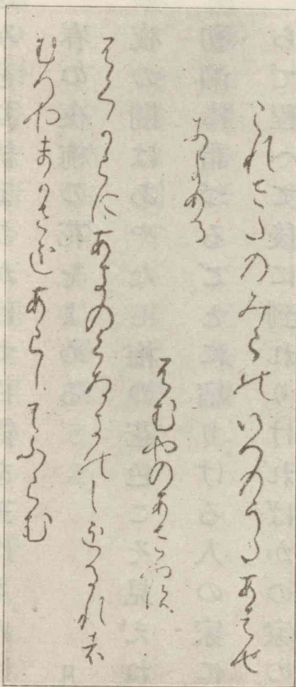
紀 友 則

小野小町
平安時代の女流歌人
六歌仙の一人

ひさかたの光のどけき春の日にしづごころなく花の散る
らむ
題しらず
小野小町
花の色は移りにけりないたづらにわが身よにふるながめ
せしまに

筆蹟

これさだのみこのい
へのうたあはせによ
める
ふむやのあさやす
ふくからにあきのく
さきのしをるればむ
べやまかせをあらし
てふらむ



傳紀實之筆

伊勢

平安時代の女流歌人
伊勢守藤原繼蔭の女

五月來ば鳴きもふりなむ時鳥まだしき程の聲をきかばや
題しらず
伊勢

清原深養父
平安時代の歌人
延喜延長年間の人

月の面白かりける夜曉によめる
清原深養父
夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどる
らむ

藤原敏行
平安時代の歌人
延喜七年(癸亥)歿

秋立つ日よめる
藤原敏行朝臣
秋來ぬと眼にはさやかに見えねども風の音にぞおどろか
れぬる

題しらず
讀人しらず
緑なるひとつ草とぞ春はみし秋は色々の花にぞありける
仙宮に菊をわけて人の到れるかたを

素性法師

平安時代の歌僧
俗名良峯玄利
僧正遍昭の子

素性法師
ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千年をわれは經に
けむ

題しらず

讀人しらず

ふる雪はかつぞ消ぬらしあしびきの山の瀧つ瀬おとまさ
るなり

大和國にまかれりける時に雪の降りけるを見て

よめる 坂上是則

あさぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里にふれるしら
ゆき

年のはてによめる 春道列樹

昨日といひ今日とくらして飛鳥川ながれて早き月日なり
けり

題しらず 讀人しらず

鹽の山さしでの磯にすむちどり君が御代をばやちよとぞ

坂上是則
平安時代の歌人

春道列樹
平安時代の歌人

鹽の山
さしでの
共に山梨縣甲斐國東
山梨郡にある歌枕

鳴く

大江千古が越へまかりける馬のはなむけによめる

藤原兼輔朝臣

君がゆくこしの白山しらねどもゆきのまに／＼あとはた
づねむ

志賀の山越にて石井のもとにものいひける人

紀貫之

むすぶ手のしづくににぐる山の井のあかでも人に別れぬ
るかな

あひ知れりける人の身まかりにける時によめる

壬生忠岑

ぬるがうちに見るをのみやはゆめといはむはかなき世を

藤原兼輔
平安時代の歌人
白山
加賀の白山

志賀の山越
今の天津市の北方滋
賀里より山中を経て
京都市の東北部白川
に出る山路
白川越

壬生忠岑
平安時代の歌人
古今集撰者の一人

もうつゝとは見ず

題しらず

読人知らず

紫のひともとゆゑに武藏野の草はみながらあはれとぞ見る

惟喬のみこ

文徳天皇の第一皇子
寛平九年(五七)薨
年五十四

惟喬のみこの狩しける供にまかりて宿りに歸りて

夜一夜酒を飲み物語をしけるに十一日の月も隠れ

なむとしけるをりにみこ酔ひて内へ入りなむとし

ければよみ侍りける

在原業平朝臣

在原業平

平城天皇の孫
阿保親王の子
元慶四年(五〇)卒
年五十六

あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにげて入れず
もあらなむ

常陸歌

筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君がみかげにますか

げはなし (古今和歌集)

一一 歌人逸話

正宗敦夫

正宗敦夫
國文學者
明治十四年岡山縣和
氣郡生

紀貫之が或時紀伊國に赴くとて夜和泉國を馬に乗つて過ぎよ
うとした。處がゆくりなく騎馬が倒れてしまつてどうにもな
らぬ。暗さは暗し、貫之も施す術が無かつた。しかし神の燈火
が風にゆらめき幽かに鳥居が見えたから、見れば神社の前であ
ると云ふことが知れた。先づやゝ落ちついた氣分になつて、此
の神は何れの神におはす。と呼びかけた。幸にも人のけはひが
してやがて禰宜が顯れて来て、嚴かな聲で「蟻通明神である、若し
乗打ちにしたのではないか。」と咎めるけしきであつた。「いかな
る神のおはすと知らず。」と詫びしげに答へる外はなかつた。禰



(傳藤原信實) 之 貫 紀

宜は神がかりになつて、汝、我が前を馬で乗打ちにするとはけし
 からぬ。暗夜の事で知らずにとあら
 ば其の罪は免しつかはしてもよいが、
 和歌の名人と聞及んだ其の方、歌一首
 を奉つて詫び言白せ。馬も起してつ
 かはず。との託宣が有つた。貫之は大
 いに驚いて敬虔な心持で、
 あま雲の立ちかさなれる夜半
 なればありとほしとは思ふべ
 しやは
 と詠んで拜み入つて其の罪を謝した。
 馬が頭を振る音がはた／＼と鳥居のかなたに聞えて、一聲高く

主人を呼ぶやうに嘶いた。

清少納言
 平安時代の女流文學者
 一條天皇の皇后藤原定子に仕へた
 枕草子の著者

清原深養父
 平安時代の歌人
 元輔
 平安時代の歌人
 正暦元年(空)歿
 年八十三

皇后
 藤原定子
 關白道隆の女
 長保二年(空)歿
 年二十五

内大臣
 藤原伊周皇后定子の
 兄

清少納言は清原深養父の曾孫、元輔の女であつて一條天皇の皇后に仕へた。かつて彼は皇后に述懐めいた事を申し上げて歌を詠めと仰せらるゝ事を封じてしまつた。それは彼が少しでも好い歌を詠出づるならば人々が、何と云つても歌道の家の子孫であるからと稱揚してくれるであらうが、其の反對に腰折歌でも詠出でてもしようものならば、物笑の種となつて祖先を辱しめるやうなことになるであらうから、歌は詠みたくないなどと眞面目に勝手な事を申上げたが、皇后は御笑になつて、心任せにするがよい。と御仰になつた。それで大層氣が樂になつたと嬉しがつてゐた。或時、内大臣が大層用意をして庚申待をして人々に歌を作らせられた。清少納言が一向歌を詠む様子が無

いので、彼にも題を取れなど云はれたが、彼は歌詠む事はせずともよいと云ふ御許を得てゐると言つて一向取合ふ氣色もない。他の人々は一所懸命に作歌に熱中してゐた。其の時皇后から一寸した御書を下された。見ると

元輔がのちと云はれし君しもやこよひの歌におくれてはをる

と云ふのであつた。見るからに笑まずにはゐられなかつた。大臣も「何事か」と仰せられた。彼は

その人の後と言はれぬ身なりせばこよひの歌は先づぞよままし

遠慮する事が無いのならば、千首の歌でも進んで、奉りますと御答へした。

西行

平安朝の末鎌倉期の

始の歌人

俗名佐藤義清

建久元年(八五〇)寂

年七十三

定家

鎌倉時代の歌人

俊成の子

新古今集の撰者

仁治二年(二五〇)卒

年八十

俊成

鎌倉時代の歌人

千載集の撰者

元久元年(二六四)薨

年九十一

歌を詠むのは人々の癖の有るもので、西行は行脚に出でて歌をよみ、定家は南面をとり拂つて、真中にゐて南を遙かに見はらし、て衣文取りつくろうて詠むのを常とした。これは内裏、仙洞などの晴の御會におくれを取らぬ様に日頃から用意してゐたのであると云はれた。如何にも定家に相應した心懸けであらう。父俊成の歌案じのさまは、人々にゆかしがられたと見えて、彼の像は此の姿であらはされ、世間にも遍く知られてゐるのは、常にすゝけたる淨衣の衣ばかりを打被りて、桐火桶に肘を突き寄懸つて靜かに夜も晝も案ぜられた、かりそめにも打臥しなどせられる様な事は無かつたと傳へられてゐる。老後に及んで、さても明け暮れ歌にのみ思を寄せて後の世の勤めを爲さざりし事よと、其の世の習慣で、ふと彼も遣る瀬ない心が動いた。彼は早

住吉の御社
今の大阪市住吉區に
ある官幣大社
和歌三神の一

宮内卿
俊成卿の女と宮内卿とは共に新古今の作者として著名である。
俊成卿の女と云ふのは、大納言通具卿の室となられた人である。
其頃の男女おしなべて此の人に及ばぬと云ふ評判の立つた程
の閨秀作家であつた。「小野小町にもたぐひたる人なり」など言
騷がれた。此の人は又武き心の持主でも有つたと見えて、父俊
成卿から譲られた播磨國越部莊を地頭の妨多しとして北條泰時

越部莊
播磨國美囊郡

速住吉の御社に一七日の參籠をして、若し歌が徒事ならば今か
ら此の道をさし置いて、一向に後生の勤めに精進致しますと祈
念をした。ところが満願の夜の夢に、明神が現じ給ひて「御前は
歌道以外に別に佛道を求める必要はちつとも無い。」唯々従前
通り歌に心を打込んでゐればよい。後生を案ずるな」と示し給
うた。彼は安心して益歌に専念した。

君ひとりあとなき麻のかずしらば残るよもぎのかずを
ことわれ
と云ふ歌を送つた。地頭の非法は、評定にも及ばずとゞめられ
たと云ふ事がある。

俊房
源俊房
左大臣兼左近衛大將
保安二年(二七)薨
年八十七

宮内卿と云ふは俊房大臣の裔に當り、右京大夫師光の女で、極め
て歌に巧みなる才媛であつた。千五百番の歌合の催しがあつ
た時に、後鳥羽院が、此度の作者は何れも著名な大家揃であるが、
宮内卿のみはまだ年も若く、さまで世に聞えてゐないが、必ず秀
歌を詠出でて高名するに相違ないと思召された。宮内卿を近
近と御召しになつて、朕がおもておこす程の歌を詠出でてよ、樂し
みに待つてゐる。」とやうな御仰言も有つた。宮内卿は興奮の面

もちで涙ぐみつゝ、忝さを謝し奉るのであつた。其の折の歌は何れも力作であつたが、中にも
うすくこき野邊のみどりの若草にあとまで見ゆる雪の
村消え

と云ふやうな秀逸があつた。

無名抄の傳ふる處によると、此の宮内卿と俊成卿の女とは歌詠みいづる折の態度がいちじるしく異なつてゐたと沙汰せられてゐる。俊成卿の女は晴の歌詠まんとする時は、先づ種々の集どもを取出でて心行くばかりに讀耽るのである。さてそれからいよゝゝ作歌する時になると書物をば全く片付けて、人を遠ざけ、燈を幽かに點じ、いと閑寂なるさまにて苦吟した。宮内卿は初から草子巻物の類をとりこみて、切燈臺に火近くとぼして、

無名抄
和歌についての隨筆
二卷
鴨長明著

書きつけゝ歌を案じて倦むことを知らなかつた。几帳の奥深く夜晝の分ちもないと云ふ有様であつた。或時はあまり歌を案じわづらひて既に命にも懸ると云ふやうな大變に及んだ事もあつた。父の禪門が、何事も命があつての上の事である。病になるまで歌案じ暮すは餘りの凝りやうで有る。と注意したが、かゝる常識的の諫など、創作に魂を打込んでゐる彼の耳に入るべくもなかつた。遂に彼は歌と命を取りかへてしまつた。

(短歌講座)

一二 銀線を描く

浦松 佐美太郎

空が灰色に冷たく凍る日、私たちは雪を待焦れる。東京の街から見える富士が、その白さを増して來るにつれて、私たちは北の

浦松、佐美太郎
經濟學者
登山家
明治三十四年大阪市
生

國の山を想ふ。雪の國から入つて來る汽車の屋根に雪の載つてゐるのを見れば、假令煤に汚れて固く凍つてゐようと、あの雪の降つた北の國の山がなつかしくなる。殊に過ぎし日の瑞西の旅が思ひ出される。

幾つかのループトンネルをくゞつて、汽車が急角度に山の斜面に登るにつれて、雪が深くなつて來る。サンモリツの停車場は流石に大きなものである。驛の前には、何臺もの馬櫓が待つてゐる。馬の吐く息が眞白。山に圍まれた此の町には、到る處にスキー場がある。併し、ホテルの裏のスキー場よりも、もつと心を強く惹くものは、遠くに光る山の雪である。サンモリツから南へ、ポントレシーナのあたり、樅の林を通り抜けてゆくと、瑞西

ループトンネル

Loop-tunnel

サンモリツ

Saint Moritz

瑞西の東部

ポントレシーナ

サンモリツの東南十五軒

Pontrasina

ピッツ、パリュ

Piz Palü

ピッツ、ベルニーナ

Piz Bernina

セント、バーナード

Saint Bernard

カンテラ

Candelaar

和蘭語カンテラ
の訛
油火をとぼす臺

と伊太利亞の國境の山々が聳え立つて來る。四千米に近いこれらの山々は、冬の装に美しく輝いてゐる。ピッツ、パリュ、ピッツ、ベルニーナ、中でも此の二つの山は、づば抜けて美しい。ベルニーナの峠を越えて、伊太利亞へ滑つてゆくのも面白い。谷を下つてゆくにつれて、緑濃い南の國の平原が望まれる。振返れば、アルプスはまだ冬の眞中だ。ベルニーナの峠の避難所には、大雪の記録をつけた、雪の深さを計る棒が立つてゐる。嘗て幾人かの旅人をたすけたといふセント、バーナードが、仔犬をつれて楽しさうに雪に戯れてゐた。ピッツ、ベルニーナに登る朝であつた。未だ星の光の強い三時に、氷河のほとりにある山小屋を出た。先頭のカンテラが、流星のやうに尾を曳いてすうつと滑つてゆく。その光を目當てに

次々にその後を追つて滑つてゆく。夜の寒さに凍つた雪は、雪

よりは砂の様に感じられた。

沙漠の上をスキーで歩いてゆ

く。カンテラで照らし出され

た雪は、そんな不思議な錯覺を

さへ興へた。夜のほのく明

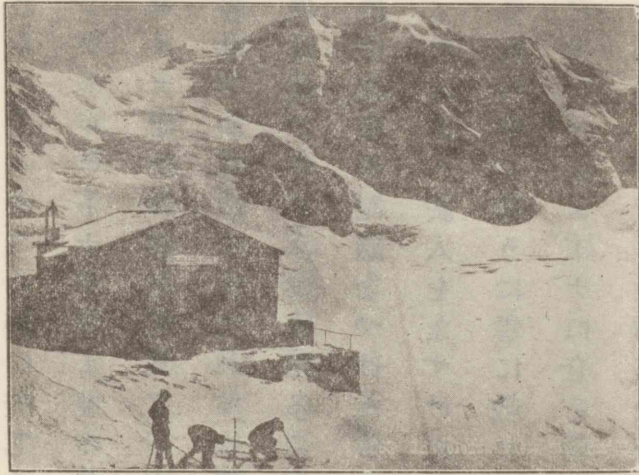
けに、私たちと一緒に登つてゐ

たり、リッシュは、氷河の割目に落

込んでしまった。三十分もか

かつて綱でやつと引張り上げ

た頃には、ベルニーナの頂は、朝



Walter Risch
(1895—)

瑞西の登山家
内者

リッシュ

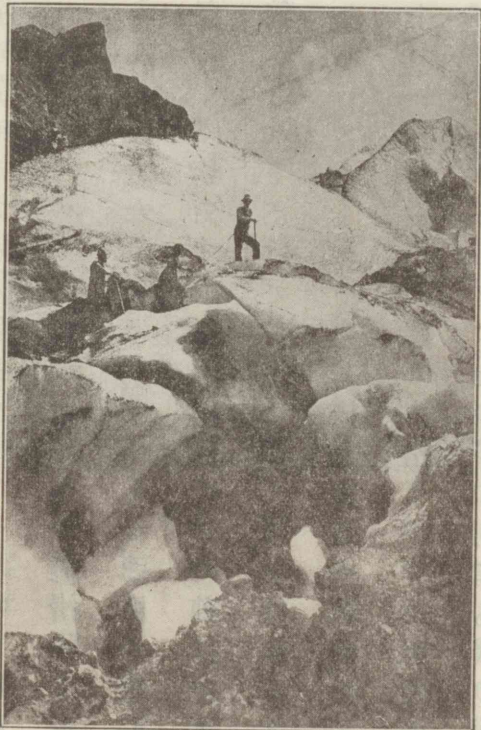
日を浴びて薔薇色に輝いてゐた。

ピッツ、パリュエーを下る時は、四千米に近い頂上のすぐ下の所で
スキーを著けて、そのまゝ一氣に滑り下つた。下る道は、一度國
境線を越えて伊太利亞へ出て、そして又瑞西へ引返して来る。
二哩に近いパリュエー氷河の上の直滑降は、豪壯なものであつた。
あんな雄大な景色の中で滑ると、速度の感じが違つて来る。た
だ遠くに見えてゐた山が、急に目の前にそゞり立つて来るのに
驚かされるだけで、非常な勢で滑つてゐるといふ感じが少しも
ない。スキーをやめて後を振返へる時、長く／＼つながらる雪の
上の一線を眺めて、始めて滑り下つた距離の長さに驚かされる。
そして下つてしまつたのが、如何にも残り惜しく思はれる。晴
れた日の夕方、眞紅な夕陽を浴びながら山を滑り下るのも、嬉し
い事の一つだ。雪の上に落ちる影が、鮮かなコバルト色に光つ

コバルト
紺青
Cobalt

てゐる。

月の明い夜、氷河の上をスキーで走つてゆくのも面白い。山の



河水のスプルア

陰は、死んだ様に
黒く沈んでゐる。
月に照らし出さ
れる山の形は、お
伽嘶の世界以外
にはありさうに
もない程誇張さ
れてゐる。 聲を

立てれば、山が揃つてわめき出しさうだ。人の世界から、全く斷
切られたと思はされる。

そんな寒い或夜であつた。スキーがかち合つた拍子に、凍り切
つてゐた金具が、ぼきりと折れてしまつた。小屋に歸つてから、
靴を脱がうとしても、靴下が底に凍りついてゐて、なか／＼取れ
なかつた。

山から歸つて來て、何時も物足らなかつたのは、温泉がない事であつた。そんな時には日本のスキー場が、無暗と懐かしかつた。雪の中に涌出てゐる熱い湯は、どんなに嬉しいものか知れない。一日スキーで走り廻つて疲れた體を、温泉の中にのび／＼とさせる氣持。日本のスキー場は、その點では恵まれてゐる。恐らくこんな贅澤な設備は、外の國では眞似も出來まい。新しく開かれたスキー場の多くも、皆温泉を持つてゐる。クリスマスから新年へかけての瑞西の夜は、一年中で一番賑や

Alps
アルプス

Rucksack
登山用の背囊
ルックサック

かな時であらう。國際急行列車の着く度に巴里から、倫敦から、伯林から、スキーと荷物とお客とがアルプスに圍まれた村々へ運ばれて来る。しかし本當に山を知り、雪を味はうとする者には、これは稍大業に過ぎる。すぐ眼の前に山は聳えてゐるのだ。何も大がかりで谷の奥深く入つてゆくまでの事はない。海豹の皮をつけて、四時間かそこら近くの山へ登つてゆけばよいのだ。其處は雪だけの世界だ。心ゆくまで飽きるまで雪が味はへるのだ。

日の光が樅の林をすかして、雪の上に美しく縞目に輝いてゐる朝、山の斜面に沿うて登つてゐると、自分よりも先にゆく二人の姿が見えた。白いシャツ一枚になつて、煙草を吸ひながら楽しさうに登つてゐる。背負つてゐるルックサックも軽さうだつ

Tirol
チロル
塊地利の西部で
瑞西に近い州

た。追ひぬきしなに聲をかけて驚いた。二人とも女の子だつたのだ。雪の強い反射の中に立つてゐる二人の姿は、いかにもさば／＼してゐた。山の上の小屋は、見晴しもよかつた。しかしそれよりも、其處らあたりを滑り廻つてから、薪を眞赤に燃したストーヴを圍んで、小屋番のビールを御馳走になりながら、皆で唱つた山の歌が忘れられない。チロルで過した冬の日の思出である。日本にも、あんな山小屋が方々にあつたらばと思はせられる。

人の情熱は、一度燃えたとてば、随分激しい所までゆく。雪の魅惑は、更に奥深く高い山へと人を誘ふのだ。冬の山では、一切が雪の下に凍つてゐる。たゞ風だけが、氣の向くまゝに到る處に荒

れてゐる。冬の山に入つてゆく氣持は、修業の僧が、道場へゆくその氣持にも似通つてゐる。山を求め、雪を思ふ情熱が、人をしめて此の峻巖な冬の山にひたすらに向はしめるのである。

一三 寺子屋

竹田 出雲

「ずは、身の上。」と源藏も、妻の戸浪も胸を据ゑ、待つ間程なく入來る兩人、やあ源藏、此の玄蕃が目の前で、討つて渡そと請合うた菅秀才が首、さあ請取らう、早く渡せ。」と手詰の催促、ちつとも臆せず、「假初ならぬ右大臣の若君、搔首ねぢ捻首ねぢにも致されず、暫くは御用捨。」と立上るを松王丸、やあ、其の手はくはぬ。暫しの用捨と隙どらせ、逃支度しても、裏道へは數百人を附置き、蟻の這出る處もない。生顔と死顔は相好がかはるなどと、身代りの贖首、それもたべぬ。

竹田出雲

江戸中期の戯曲作者

江戸に生れ大阪に住

む

近松門左衛門の門人

寶曆六年(一七六六)歿

年六十六

源藏

菅原道真の家來

武部源藏定胤

主君道真より筆道の

傳授を受けたが道真

左遷の後京都の北の

山里芹生村で寺子屋

の師匠になり主君の

一子菅秀才をわが子

として立上げて居

た事が漏れて時平公

から菅秀才の首を討

取の使が來た

兩人

藤原時平公の家來春

藤玄權尤友景

首實檢の役松王丸

古手な事して後悔すな。」といはれてぐつとせき上げ、やあ、いらざる馬鹿念、病みほうけた汝が目玉がでんぐり返り、逆様眼さかさままなこで見ようは知らず。紛れもなき菅秀才の首、追附け見せう。「お、其の舌の根の乾かぬ内に早く討て。とく斬れ。」と玄蕃が權柄、はつとばかりに源藏は、胸を据ゑてぞ入りにける。

傍に聞居る女房は、こゝぞ大事と心も空、檢使は四方八方に、眼を配る中にも松王、机文庫の數を見廻し、やあ、合點の行かぬ、先達て往んだ餓鬼等は以上八人。机の數が一脚多い。其の悴は何處にをるぞ。」と見咎められて戸浪ははつと、「いや、こりや今日始めて寺、いや寺參した子がござんす。」何、馬鹿な。「お、それ、これ」が即ち菅秀才のお机文庫。」と、木地を隠した塗机、ざつと捌いて言抜ける。「何にもせよ隙どらす油斷の本。」と、玄蕃諸共突立上る。

こなたは手詰、命の瀬戸際、奥にはばつたり首討つ音、はつと女房



(形人操) 松王首實檢

胸を抱き、踏ん込む足もけしとむ
内、武部源藏白臺に、首桶乗せてし
づしづ出で、目通りに差置き、是非
に及ばず、菅秀才の御首討奉る、い
はば大切な御首、性根をすゑて、
さあ松王丸、しつかりと檢分せよ。
と、忍の罽元寛げて、虚といはば斬
附けん、實といはば助けん。」と、堅唾
を呑んで控へ居る。「は……何の
これしきに、性根どころか、今淨玻
璃の鏡にかけ、鐵札か金札か、地獄・極樂の境。家來衆、源藏夫婦を

淨玻璃の鏡

闇寛の廳にある鏡
この鏡に映して善人
か悪人かを見分け善
人には金製の札を渡
して極樂へ悪人には
鐵製の札を渡して地
獄へ送るといふ

取巻きめされ。」畏まつた。」と捕手の人數十手振つて立懸る。女
房戸浪も身を固め、夫は固より一所懸命、さあ實檢せよ、檢分。」と、い
ふ一言も命がけ、後は捕手、向ふは曲者。玄蕃は始終眼を配り、こ
こぞ絶體絶命。」と思ふ内、はや首桶引寄せ、蓋引明けた首は小太郎、
贗というたら一討と早抜きかくる。戸浪は祈願、天道様、佛神様、
憐み給へ。」と女の念力。眼力光らす松王が、ためつすがめつ窺ひ
見て、「うん、こりや菅秀才の首討つたは、まがひなし、相違なし。」とい
ふにもびつくり源藏夫婦、あたりきよろしく見合はせり。
檢使の玄蕃は檢分の詞證據に、出かしたく。よく討つた。褒
美にはかくまうた科赦してくれる。いざ松王丸、片時も早く時
平公へお目にかけん。」いかさま隙取つてはお咎めもいかゞ。
拙者はこれよりお暇賜はり、病氣保養致したし。」お、役目は濟

んだ。勝手にせよ。」と首請取り、玄蕃は館へ、松王は駕籠に揺られて立歸る。夫婦は門の戸びつしやりしめ、物もえ言はず青息太息、五色の息を一時に、ほつと吹出すばかりなり。胸撫でおろし源藏は、天を拜し、地を拜し、あゝ有りがたや、忝や。凡人ならぬ我が君の、御成徳が顯れて、松王めが眼がかすみ、若君と見定めて歸つたは、天成不思議のなす所、御壽命は萬々年、悦べ女房。「いや、もうく大抵の事ぢやござんせぬ。あの松王めが眼の球へ、菅丞相様がはいつてござつたか。但し首が黄金佛ではなかつたか。似たというても瓦と金、寶の花の御運開と、餘り嬉しうて涙がこぼれる。はあゝ有りがたや尊や。」と悦びいさむ折からに、小太郎が母いきせきと、迎と見えて門の戸叩き、寺入の子の母でござんす。今漸く歸りました。」といふ聲聞くより又び

小太郎
今日源藏の寺子屋へ
入門した子實は松王
丸の子
小太郎が母は松王丸
の妻千代

つくり、一つ遁れて又一つ、こりやまあ何と、どうせう。」と妻が騒げど夫は胸据ゑ、こりや、最前言うたはこゝの事。若君には替へられぬ。狼狽者。」と戸浪を引退け、門の戸ぐわらりと引明くれば、女は會釋し、「これはまあくお師匠様でござりますか。わるさをお頼み申します。何處に居やるぞ、お邪魔であるに。」といふをさいはひ、「いや奥に子供と遊んで居ります、連立つて歸られよ。」と眞顔でいへば、「おゝ、そんなら連れて歸りましよ。」と、ずつと通る後より只一討と斬附くる。女もしれ者、ひつばづし、逃げても逃さぬ源藏が又するどく斬附くるを、我が子の文庫ではつしと請けとめ、「これ待つた待たんせ。こりやどうぢやと、はねる又も用捨なく、又斬附くる文庫は二つ、中よりばらりと經帷子、南無阿彌陀佛の六字の幡、顯れ出でしは、「こはいかに。」と、不思議の思に劔も鈍り

梅は飛び
菅公の愛してゐた梅
が一夜の内に筑紫の
安樂寺に飛んだとき
の菅公の詠といふ

兄弟三人
梅王は菅原道真公の
舎人

進みかねてぞ見えにける。
小太郎が母涙ながら、若君菅秀才のお身代り、お役に立てて下さつたか。まだか。様子が聞きたい。といふにびつくりして、それは得心か。「得心なりやこそ此の經帷子、六字の幡。」うん、して其の許は何人の御内證。と尋ぬる内に門口より、梅は飛び、櫻は枯るゝ世の中に、何とて松のつれなかるらん。女房悦べ。悴はお役に立つたぞ。と聞くよりわつとせき上げて、前後不覺に取亂す。「やあ未練者め。」と叱りつけ、ずつと通るは松王丸。見るに夫婦は二度びつくり。夢か、現か、夫婦かと呆れて詞もなかりしが、武部源藏威儀を正し、二禮は先づあとの事。これまで敵と思ひし松王、打つて替つた所存はいかに。不審しさよ。と尋ねれば、お御不審尤。存じの通り、我々兄弟三人はめいゝに別れて奉

松王は藤原時平公の
舎人
櫻丸は齊世親王の舎
人
三人は四郎九郎とい
ふ者の三つ子
丞相様
右大臣菅原道真公

著
占に用ひる筈

公。情なや此の松王は時平公に随ひ、親兄弟とも内縁切り、御恩請けた丞相様へ敵對。主命とはいひながら、皆これこの身の因果、何とぞ主従の縁切らんと、作病構へ、暇の願。菅秀才の首見たらば、暇やらんと、今日の役目。よもや貴殿が討ちはせまい。なれども身代りに立つべき一子なくば、如何せん。こゝぞ御恩を報ずる時と、女房千代と言合はせ、二人の中の悴をば、先へ廻して此の身代り。机の敷を改めしも、我が子は來たかと心の蒼。菅丞相には我が性根を見込み給ひ、何とて松はつれなからうぞとの御歌を、松はつれないと世上の口に懸る悔しさ。推量あれ、源藏殿。悴がなくばいつまでも、人でなしといはれんに、持つべき者は子なるぞや。といふに、女房猶せき上げ、草葉の蔭で小太郎が、聞いて嬉しう思ひましょ。持つべき者は子なるとは、あの

子が爲によい手向。思へば最前別れた時、いつにない跡追うたを、叱つた時の其の悲しさ。冥途の旅へ寺入とはや蟲が知らせたか。隣村へ行くというて、途までいんで見たれども、子を殺さしにおこして置いて、どうまあ内へいなるゝものぞ。死顔なりとも、今一度見たさに、未練と笑うて下さんすな。包みし祝儀は、あの子が香奠、四十九日の蒸物まで持つて寺入さすといふ悲しいことが世に有らうか。育ちも生れも賤しくば、殺す心もあるまいに、死ぬる子はみめよしと、美しう生れたが、かはいや其の身の不仕合はせ。何の因果に疱瘡までしまうた事ぢや。」とせき上げて、かつばと伏して泣きければ、俱に悲しむ戸浪は立寄り、「最前にな、連合の身代りと思附いたそばへいて、『お師匠様、今から頼み上げます。』というた時の事思ひ出せば、他人のわしさへ骨身が碎

死ぬる子は
死にし子、ほより
き(土佐日記)

櫻丸
おのが淺慮から道眞
公左遷の因をなした
ことを悔いて自殺し
た

ける。親御の身ではお道理」と、涙添ふれば、いやこれ御内證。こりや女房も何てほえる。覺悟した御身代り、内で存分ほえたてないか。御夫婦の手前もある。いや何、源藏殿。申し附けてはおこしたれども、定めて最期の節、未練な死を致したて御座らう。」「いや若君菅秀才の御身代りと言聞かしたれば、潔う首差伸べ。」「あの逃隠れも致さずにな。」につこりと笑うて。「うん、出かし居りました。利口な奴、立派な奴、健氣なやつや九つで、親に代つて、恩送り、お役に立つた孝行者、手柄者と思ふから、思ひ出すは櫻丸、御恩も送らず先立ちしさぞや草葉の蔭よりも羨ましからう、けなりからう。悴が事を思ふにつけ、思ひ出さるゝ、出さるゝ。」と、さすが同腹同姓を忘れかねたる悲歎の涙。「なうその伯父御に、小太郎が逢ひますはいの。」と取附て、わつとばかりに泣沈む。

歎も漏れて菅秀才、一間の内より立出で給ひ、我に代ると知るならば、この悲しみはさすまいに、かはいの者や」と御袖を絞り給へば夫婦ははつと共に浸する有難涙。「序ながら若君様へ御土産」と松王突立ち、申附けた用意の乗物、早く〜。と呼ばはるにぞはつと答へて家來共御目通に昇きする。「早御出」と戸を開けば菅丞相の御臺所。「なう母様か。」「我が子か。」「御親子不思議の御對面。源藏夫婦横手を打ち、方々と御行方尋ねしに、何處にか御座なされし。」「されば〜、此の嵯峨の御隱家、時平の家來が聞出し、召捕に向ふと聞き、某山伏の姿となり、危い處を奪ひ取つたり。急ぎ河内の國へ御供なされ、姫君にも御對面。こりや〜女房、小太郎が死骸あの乗物へ移し入れ、野邊の送、菅まん。」「あい。」と返事、其の中に、戸浪が心得、抱いてくる死骸を網代の乗物へ乗せ

六道

地獄道
餓鬼道
畜生道
修羅道
人間道
天上道

能化

師となつて他を教化するもの
所化に對す
六道能化の菩薩とは
地藏菩薩をさす

賽の河原

冥途の三途の川のほとり小兒が小石で塚を積むと大鬼が來ては崩してしまふそれを地藏菩薩が現れて救ふといふ
劍と死出のやま
劍の山死出の山共に冥土にあるといふ山

土井晚翠

英文學者
詩人
名は林吉
第二高等學校教授
明治四年仙臺生

て、夫婦が上着を取れば、あはれや内より覺悟の用意、下に白無垢麻社袴。心を祭して源藏夫婦、野邊の送、親の身で、子を送る法はなし。我々夫婦が代らん。」と立寄れば、松王丸、「いや〜、これは我が子にあらず。菅秀才の亡骸を御供申す。何れも、門火々々。」と門火を頼み頼まるゝ、御臺若君諸共に、しやくり上げたる御涙。冥途の旅へ寺入の師匠は彌陀佛、釋迦牟尼佛、六道能化の弟子になり、賽の河原で砂手本、いろは書く子のあへなくも、ちりぬる命是非もなや。あすの夜たれか添乳せん。らむうい目見る親心、劍と死出のやま、あさき夢見し心地して、跡は門火にゑひもせず、京は故郷と立別れ、鳥邊野さして連れ歸る。(菅原傳授手習鑑)

一四 日本の女性

土井 晚 翠

相馬御風
文學者
名は昌治
明治十六年新潟縣糸
魚川生

操は嚴冬雪ふるなかに
ほゝゑむ寒梅にほひやたぐふ。
ほまれは千尋暗なる谷に
潜める幽蘭かをりに似るか。
いさをは蒼溟波捲く淵に
輝く白玉、光といづれ。
嗚呼君、見えざる無上のいさを。
嗚呼君、聞えぬ至高のほまれ。
嗚呼君、知れざる究竟の操。
大なる國民、君よりおこる。
涙に情に操に愛に

嗚呼君、やさしき女性の力。(晩翠詩集)

一五 大人と子供

相馬御風

あづさゆみ春さり來れば、
飯乞ふと里にいゆけば、
里子ども道のちまたに
手まりつく、我もまじりぬ、そが中に。
ひ、ふ、み、よ、い、む、な
汝がつけばあは歌ひ、
あが歌へば汝がつきて、
つきて、歌ひて、霞立つ
ながき春日をくらしつるかも。

これは私の最も好きな良寛和尚の歌の一つである。良寛は到る處で子供たちと仲よしになつた。そして到る處で彼等と共に遊んだ。子供たちはまた到る處で良寛を歡び迎へた。そして到る處で彼と共に遊んだ。良寛ほど子供と打ちとけ合つて遊び得た人は稀であらう。

子供と共に遊ぶ——これくらゐ大人にとつてむづかしいことはなからう。單に子供を遊ばせてやるだけではない。又單に子供を相手に遊ぶだけでもない。子供と共に遊ぶのである。互に一つに融けあつて遊びあふのである。これは大變なことである。

どうかして子供を喜ばせてやらう——かうした思はくやはからひがあつては、却つて子供は遊ばない。どうかして子供と遊

びたいものだ、どうしたらよからう——そんな思案があつても子供は却つて遊んでくれない。不思議に、子供はこちらのぼんやりしてゐる時に、何等の成心もない時に、却つて打解けて遊びかゝつてくるものだ。子供のやうな純一無礙な心境を以てでなければ、子供と共に遊ぶことが出来ない。子供と共に遊び得る心は、萬物と共に遊び得る心だ。

しかし、本當に子供と共に遊び得る人は少い。

教育は相互生成でなければならぬ。教師が生徒を教へるだけが教育ではない。親が子を教へるだけが教育ではない。大人が子供を教へるだけが教育ではない。教師も生徒から、親も子から、大人も子供から、教育されなければならぬ、そして相互に伸

びてゆく——それが本當の教育であると思ふ。童心の尊さが近來盛に説かれるやうになつて來た。喜ばしい現象である。しかし、それは兒童の教育に於て童心を尊重するといふだけであつてはならない。同時にそれは教師なり、親なり、又一般の大人なりが、童心の感化をひねくれずに受容れることとでなければならぬ。兒童を教育すると同時に、自己も亦兒童からの教育を十分に受容れて、共に——伸びゆく教師こそ、本當に私たちの要求する教師である。

四歳になる私の女の子をつれて海濱に遊んでゐた時、偶然彼女の小さな口から、かういふうれしい言葉を聞かされた。

「とうちやん、此の石もらつていませう。」

彼の女は海濱の小石原から自分の氣に入つた美しい色の小石を三つ四つ拾ひ上げてかういつたのであつた。海濱から石を貰つて行く——それは拾つて行くのでも、採つて行くのでもない——何といふ美しい心情の現れであらう。野から花を貰つて行く、樹から果實を貰つてたべる。「その心！その心！」私はさう獨で心に叫ばずにはゐられなかつた。「尊いわが子の心よ。父さんはおまへのさういふ心をおまへが現在持つてゐる程の眞實さで、これまで一度だつて持ち得たであらうか。」私はそんな風にも自らを省みないではゐられなかつた。家のまはりに草花の種を蒔く。芽が出るとそれを培ひ育てる。

そして美しい花を咲かせて歡び眺める。
 つぎ／＼に人が來てはその花を眺め楽しんでくれる。それが
 またむやみと嬉しい。見て楽しんでくれる人が多ければ、多い
 ほど更に嬉しい。芽は育てれば育てるほど、育てる者にとりて
 の歡も増す。花の美は享樂してくれる人が多ければ多いほど、
 培ひ育てた人にとりて豊かさを増すやうに感じられる。

土は耕してくださいと人間に頼みはしない、稻も麥も人間に育
 ててくださいと頼みはしない。耕し培ふのはむしろ人間の方
 からさせて貰つてゐるのである。人間がうける自然の恩惠は
 與へられたるそれではない。自然は強ひなどはしない。凡て
 は人間が貰はせていたゞいてゐるのである。本當に謙虛な心

をもつ者のみが眞實に自然の恵にあづかることが出来る。さ
 うしたひねくれずに自然の恩惠をいたゞく心がほしい。

自然に對し、世間に對し、また他人に對し、私たちはあまりに忖度
 が多すぎる。人が何かおいしいものでも與へようとすると、い
 やにこましやくれたり、ひねくれたり、様子ぶつたりして、無邪氣
 にそれを受けない子どもが少くない。私たちにも丁度それに
 似たところが多分にある。

「太陽は大人にはその眼のみ照らすけれども、兒童にはその魂を
 照らす。」とエマーソンは云つた。それだ！それだ！（野を歩む者）

一六 同じ人間

渡邊華山

エマーソン

Emerson
(1803—1882)

米國の評論家
詩人

渡邊華山

三河國田原藩の志士

畫家

名は登

天保十二年(五〇)自

年四十九

私十二歳の時、日本橋通を通行仕候節、忘れも仕らず備前侯の御先供に當り、打擲を受け申候。當時子供ながらも大息して、備前侯は御歳大抵私と同年位なるに、大衆を率ゐて天下の大道を御横行成され、私は同じ人間にて、天分とは申しながら、その御先供に當りて打たる、事發憤に堪へず、今より何なりと志し候はば、如何なる儀にても出來申すべしと存じ、その頃高橋文平とて御祐筆相勤め申候者、私子供には候へども、日頃合口にて候間、此の者に相談に及び、爽鳩先生鷹見氏の門に入り、儒者に相成申すべしと決心仕候。さりながら私親父二十年來の持病にて、一日も看病、按摩を缺き難く候間、朝夕退食の間、之を奉公同様に相心得、母の手助け仕候。その上兄弟皆幼少にて、七人程もこれあり、唯母の手一つに

爽鳩先生
鷹見氏
田原藩の儒臣
文化八年(一七七)歿
年六十一

板橋
今の東京市板橋區板橋町
舊江戸四宿の一

熊谷宿
今の埼玉縣武藏國大里郡熊谷町

て、老祖病父私共までその日を送り候事故、何分些かの餘裕も之なく候。貧窮最も甚だしく、筆紙に盡くし候所には之なく候。之に依つて弟共は寺に奉公に出し、又は出家致させ、妹は御旗本へ奉公に遣はし申候。私十四歳許の冬、幼少の弟を板橋迄生別れに送り参り候時、ちら／＼降來る雪の中を八九歳の弟が見も知らぬ荒男に連れられ、後を振向き／＼別れ候事、今に目前に髣髴仕候。右弟は定意と申し、後熊谷宿にて客死仕候。雷之助と申すは初め七歳の時、青松寺と申す寺へ奉公に遣はし、後に御旗本屋敷へ養子に遣はし候。是以て食物足らず、困窮の餘りの事に候へば、養子とは申しながら丸裸にて、申さば親不知の様にて遣はし申候仕合はせ故、何事に就きても先方里方

を侮り候を心外に存じ、終に京都に出奔仕候。その後主人
惜しき人物に存ぜられ、引戻され候處、是又數年辛苦仕候爲、
彼の地にて病氣に罷成、歸府後、間も無く終に相果て申候。

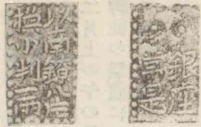


山 邊 渡

右の次第故、妹兩人も、一人は遠
方へ遣はし、一人は貧家へ罷越
し、貧死仕候。これかれを考へ
候へば、至貧至困無策無術の上
に親父大病に相罹り候爲、斯く
は兄弟過半非業同様の病死仕
候次第に御座候。これにて當時困難至極の儀御察し下さ
るべく候。

私母近來迄夜中寝ね候に、蒲團と申すもの、夜具と申すもの

南 錄
二朱銀貨



白芝山

白川芝山
名は景皓
安政年中歿
年九十一

引きかけ候を見及び申さず、破れ疊の上にごろ寝仕り、冬は
火燧にふせり申候。私親父大病故、高料の藥種、藥禮、日食の
麵類等に事缺き、疊、建具の外大抵質物に置盡くし、猶親類共
にも借盡くし候へば、僅か南錄一片の儀にて、母方身内に當
り候山伏の本所一つ目に住居候方へ、母事只今存生仕居候
助右衛門と申す弟を背負ひ、雪中を冒して罷越し、夜に入り
候て歸宅仕候事之あり候。その節私洗足の湯を沸かし候
とて衣服をこがし、大いに叱られ候儀今に覺え罷在候。之
に依つて猶又高橋文平に相談仕候處、とても學問など致し、
儒者に相成候とて、金のとれ候儀は之なく、何よりも貧を救
ふ道第一なりと申すにより、爽鳩先生を頼み、芝の白芝山と
申す畫工へ入門仕候。此の時私十六歳に御座候。

金陵

金子允圭
江戸の畫家
文化十四年(二七七)歿
年未詳

初午燈籠

二月上旬の午の日稻荷
神社の祭禮にかゝげ
る地口行燈

文晁

谷氏
江戸の畫家
天保十二年(五〇〇)歿
年七十八

然る處貧人にて附届行届かずとて僅か二年にて、師家より
斷りを受け申候。私も此の時は如何仕るべきかと泣沈み
候處、親父申候は、金陵事は大森勇三郎様の御家來に付、その
旨申したらば憐み申すべしと申すにより、弟子と相成候處、
金陵殊の外相憐み、少々は出來候様に相成候。さりながら
半紙を調へ候手段之なく候まゝ、初午燈籠の畫を作り、百枚
にて一貫の錢を取り、日本橋二丁目遠江屋、麴町天神たこや
にて憐を乞ひ、多分に相成候へば、右を以て紙筆を調へ申候。
斯く仕候間にも學問は仕度存候へども、何分閑暇之なく候
へば、冬に相成候へば朝七つ時に起出で、飯を焚き、その焚火
にて讀書仕候。右は私を憐み畫道に於て種々取立てくれ
候文晁が毎曉起出で畫を認め候咄を承りて、發憤致候次第

に御座候。右畫事少々宛内職と相成、稽古も出來候様相成
候も、全く前爽鳩先生の恩澤に御座候。
私二十六歳の正月元日、深く感ずる所これあり、
見よや春大地も亨す地蟲さへ



（筆山嶺邊渡）夢 耶 郡

と申す句仕
候。之に依
つて一齋へ
も申談じ學
問仕候へど
も、何分寸暇

なく候へば、夜中にても參り申すべきに付、御門制の儀然る
べく御取成下され候様依頼候處、一齋よりその趣を書取り、

一齋
佐藤氏
徳川幕府の儒官
安政六年(五二五)歿
年八十八

親父へ申遣はされ候趣之あり、即ち親父より村松六郎左衛門殿へ夜御門限の儀に就き願ひ出て候處、六郎左衛門殿より、儒者に無之ては御門制の儀仰出され難き旨御沙汰を傳へられ候に付、終に折角の志相挫け申候。熟存じ候は上にして君に忠、下にして親に孝、皆是學問中より出來り候儀に有之、殊に上へ忠と申すことは無學無術にては叶ひ難し、これよりは愈、以て繪事を専らとして、急にしては親の貧を助け、緩にして天下第一の畫工と相成申すべき一事に思を定め申候。

繪事にて推謀り存候に、第一の心と申すもの立ち申さず候ては物の形整ひ、落なく見事には出來申さず候。又心ばかりやたけに存込候とて、手が心の通り動き申さず候ては、畫成り申さず候。又手ばかり自由に相成候とも、胴體四肢治り申さず候ては、机に向ひ、腹より溢れ候様には出來申さず候。これに依つて總身の中、髮の先、爪の端まで皆畫に相成候様仕事にて候。已に古人も「明窓淨几は書の合、風雨擾雜は書の乖」と申候。身外のものすらかくの如し。況して總身のうち猶更に御座候。今の諸侯如何にや。諸侯にして國を治めずして家中百姓に出精致せと令し候とて服従仕者これあるべきや。又奉行にても奉行だけの事を盡くし申さずして百姓に令し候ても猶更承知仕らず候。然らば上よりして下足輕に至る迄治安に志これなくては出來申さざる如く、繪事も右之通りと相心得候へども治道の事は如何哉、審に辨へ申さず候。左様に御座候へば、畫事も治道

も一理にして二理はこれなく、畫道を以て治道に試み申すべしとあらんには、隨分試み申すべく候。(華山全集)

一七 梅花

豐島與志雄

豐島與志雄
佛文學者
小説家
明治二十三年福岡縣
生

梅花の感じは氣品の感じである。氣品は一の芳香である。眼にも見えず耳にも聞えない或風格から發する香である。甘くも酸くも辛くもなく、これらのあらゆる刺戟を超越した、何とも言へぬ香である。人をして思はず鼻孔を膨らませる無味無臭の香である。それと明らかに捉へることは出来ないが、それと明らかに感じ知られる一種獨得の香である。何故にともなく、どこからともなく、どこへともなく、おのづから發散して漂つてゐる浮游の香である。

これは又梅花の香である。うつすらと霧の罩めてゐる未明の微光に、或は寂しい冬日の明るみに、或は侘しい夕の靄に、或は冷とした夜氣に、ほのかに織込まれて、捉へがたく、觸れがたく、ただ脈々と漂つてゐる一種獨得の梅花の香は、俗塵を絶した氣品の香である。この



梅 月 (筆風一森)

の香を感じてこの花を求めろのは、俗であり愚である。花のありかを求めない

いで、漂つて來る芳香に心を澄ます時、氣品の本體を知ることが出来る。

氣品はまた一の凜乎たる氣魄である。衆に媚びず、孤獨を恐れ

ず、己の力によつて自ら立ち、驕らず、卑下せず、霜雪の寒さにも自若として、己自身にほゝゑみかける搖ぎのない氣魄である。肥大でなく、矮小でなく、唯あるがまゝに満ち足りて、空疎を知らず、漲溢を知らず、恐れることなく、蔑むことのない、清爽たる氣魄である。

これはまた梅花の氣魄である。霜雪の寒さを凌ぎ、自らの力で花を開き、春に魁してほゝゑみ、しかも驕ることなく、卑下することなく、爛漫たる賑かさもなく、荒涼たる寂しさもなく、たゞ朗かに己の分を守つて、寒空に芳香を漂はしてゐる梅花の姿は、氣品そのものの氣魄である。しみんと梅花に見入ると、恐怖や蔑視や悲哀や歡喜など、すべて心を亂すやうな情緒は靜まつて、ただ氣高い氣品の氣魄に打たれるであらう。

氣品はそれ自身の性質からして、清淨であり白色であるべきである。赤や青や黄など、何等かの色に染められた氣品は、世に存しない。もとより赤や青や黄や紫など、さういふ色彩が持つことの出来る氣品はあるけれども、氣品そのものの色は、どこまでも白色である。しかし、單に白色だけでは足りない。純白の氣分を破らない程度に於て何等かの點彩を要する。鮮かな一點の色彩を包んだ純白、それが氣品の色である。これはまた梅花の色である。黎明や薄暮の微光の中に浮出す、灰赤いまでの白色、白晝の外光や深夜の闇の中に浮出す、灰蒼いまでの白色、又は月光に照らし出される薄紫にまがふまでの白色、その白色の花弁の中に花粉の黄を小さく點出した色彩は、氣品そのものの色彩である。これに眸を凝らす時、おのづから心

がすが／＼しくなつて、氣品の妙趣を悟ることが出来る。氣品には一の滋味があり、しかも同時に一の新鮮味がある。氣品は古僻でもなく、又新奇でもない。純粹の氣品は骨董と新考案とを包含し、兩者を調和したものである。老と若と舊と新とを寄せ集めて、しかもそのどれでもなく、老と舊との滋味を取り、若と新との新鮮味を取つた、一種恆久的のものである。古さから來る佶屈聱牙と、新しさから來る自由暢達と、この兩者を具出して、しつくりと落着いたものである。これはまた梅花の落着きである。銳角度をなしてぐい／＼と曲つた古木から、すい／＼と若芽をのばし、若きを育てる力を内に藏した老幹と、老いを生かす力で伸上る若枝とが、しつくりと一つの氣分に纏つて、苔の生えた古い樹皮と、艶々しい新たな樹

皮とが一樣に花を開いてゐるのは、正に氣品そのものの姿である。老いた枝にも若い枝にも一樣に咲匂うてゐる梅花を眺めると、輕佻と鈍重とを超越した氣品の沈靜に味到することが出来る。氣品は此の世には稀である。それは地上のものといふよりも、寧ろ多く天上のものであるからである。地上ではその本來の面目を汚されるといふのではないが、そこに在るのには餘りにそれが清らか過ぎる。併しそれを地上に引下して己の所有としたところに、人の魂の朗かさがある。地上から天上へと人の魂が架け渡した多くの橋梁の中の一つが、そこにあるといふことが出来る。それゆゑ、氣品はどんな人にも親しまれ易い。梅花の感じは氣品の感じてある。けれども、梅花は一の抽象で

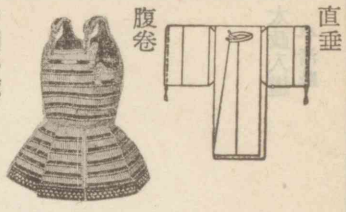
なくて、一の具象である。随つて人に親しまれ難い。あまりに芳しい香を漂はせ、あまりに凜乎たる氣魄を示し、あまりに清らかな色彩を有し、あまりに妙味のある樹に咲くので、人間離れのした感じを以て人を却けがちである。併し梅花に眸を定め、その香に心を澄ますことは、必ずしも詩人にとつてばかりでなく、普通の人にとつてもよい。なぜかといふに、地上の息吹に天上の息吹を交へることだからである。梅花には人間味が少いから、新たな心を以て梅花に接し、新たな心を以て梅花に親しむことは、人間にとつて益、よい。此の意味に於て、眞に梅花を観るのには、雑沓の巷や、廣い梅林や、人工的の盆栽や、又は月明の夜などに於てよりも、むしろ自由な、晴れ〜とした境地に於てするがよい。必ずしも美景を要しないが、たゞ自然の風趣の害せられてゐな

い伸びやかな環境の中に、一本の老木が自然のままの枝ぶりに、ぼつり〜と花を着け、仄かな香を漂はしてゐるのを、少し冷かな二月の夜明、薄霧の晴れやらぬ頃、爽かな空氣を吸ひ、小さな霜柱を踏んで、ふと氣づいたまゝ、何氣なく足を止めてしみ〜と見入り嗅入る心持、それこそ眞に梅花を観る境地である。その一本の老樹のたゞずまひと、その清らかな花の姿と、その脈々たる香と、その清冷な早朝の空氣とは、共に梅花の氣品となつて、人の心に沁みとほるであらう。これをも卑俗といふのは、卑俗ばかりを知つて高潔を知らぬからである。(旅人の言)

一八 重盛諫言

太政、入道はかやうに人々數多いましめ置いて、猶心ゆかずや

太政入道
平清盛



直垂
 中門の廊
 寢殿造りの家の表の入口
 保元
 後白河天皇保元元年
 (一一六)
 平右馬助
 清盛の叔父平忠正
 新院
 崇徳上皇
 一の宮
 崇徳上皇の長子重仁親王
 刑部卿
 清盛の父忠盛
 故院
 鳥羽法皇

思はれけん、すでに赤地の錦の直垂に、黒絲緘の腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙つて、嚴島の大明神より現に賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを脇にはさみ、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆるしうぞ見えし。「貞能」と召す。筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋緘の鎧きて、御前に畏まつてぞ候ひける。入道宣ひけるは、いかに貞能、この事いかゞおもふぞ。保元に平右馬助を始として一門半ば過ぎて新院の御方に参りにき。一の宮の御事は、故刑部卿の殿の養君にてましまししかば、旁見放ち参らせ難かりしかども、故院の御遺誠に任せて、御方にて、先をかけたたりき。これ一つの奉公。次に、平治元年十二月

平治元年
 二條天皇の御代
 (一一七)
 院
 後白河上皇
 内
 二條天皇
 經宗
 權大納言藤原經宗
 惟方
 檢非違使別當藤原惟方
 成親
 大納言藤原成親
 西光
 藤原師光
 のも入道して西光といふ
 法皇
 後白河法皇
 鳥羽の北殿
 京都市伏見區西竹田にあつた

信賴、義朝が謀叛の時、院内を取り奉つて大内にたて籠り、天下くらやみとなつたりしにも、入道隨分身を捨てて兇徒を追落し、經宗惟方を召しおこしめしに、至るまで君の御爲に既に命を失はんとする事度々に及ぶ。されば、人何と申すとも、いかでかこの一門をば七代までは思召し捨てさせ給ふべき。それに、成親といふ無用のいたづらもの、西光と申す下賤の不当人が申すことに君のつかせ給ひて、動もすれば、この一門滅さるべきよしの御結構こそ然るべからね。この後も讒奏するものあらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎮めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ移し参らするか、然らずば、これへまれ御幸をなし参らせんと思ふは、いかに。その儀ならば、定めて北面の者共が中より矢をも

一つ射んずらん。その用意せよと侍どもに觸るべし。大方は、入道院方の奉公思切つたり。馬に鞍おかせよ。きせなが取出せ。とこそ宣ひけれ。

小松殿

重盛の邸

東山の麓清閑寺の近くにあつた

法住寺殿

京都東山區瓦町三十三間堂の東にあつた

主馬判官盛國、急ぎ小松殿へ參つて、「世ははやかう候。」と申しければ、大臣聞きもあへ給はず、「嗚呼はや成親、卿の頭の刎ねられたんな。」と宣へば、「その儀では候はねども、入道殿のおんきせながを召され候上は、侍どもも皆打立つて、只今院の御所法住寺殿に寄せんとこそ出立ち候ひつれ。暫く世を鎮めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ移し參らするか、然らずば、これへまれ御幸をなし參らせんとは候へども、内々は鎮西の方へ流し參らせんとこそ擬せられ候ひつれ。」と申しければ、大臣、何に依りて、只今さる事のおはすべきとは思はれけれども、今朝の禪門の氣色、さる物狂はしきこ



重 盛 諫 言 (高橋廣湖筆)

ともやおはすらんとて、急ぎ車を飛ばせて西八條殿へぞおはしたる。門前にて車より下り、門の内へさし入つて見給ふに、入道腹巻を着給ふ上、一門の卿相・雲客數十人、各、いろいろの直垂に思ひくの鎧着て、中門の廊に二行に着かれたり。その外、諸國の受領・衛府・諸司などは、縁に居こぼれ、庭にもひしとなみ居たり。旗竿ども引きそばめく、馬の腹帶をかため、兜の緒をしめ、只今皆打立たんずる氣色どもなるに、小松殿鳥

帽子直衣に、大紋の指貫のそば取つてさやめき入り給へば、事の
外にぞ見えられける。

入道伏目になつて、あはれ、例の内府が世をへうする様に振舞ふ
ものかな。大きに諫めばや。とは思はれけれども、流石子ながら
も、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を紊らず、禮儀
を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹巻を着て對はんこと、流石
おもはゆう、はづかしうや思はれけん、障子を少し引立てて、腹巻
の上に素絹の衣をあわてぎに着給ひたりけるが、胸板の金物の
少し外れて見えけるを隠さうと、頻に衣を引違へ、ぞし給ひ
ける。

大臣は舍弟宗盛卿の座上につき給ふ。入道宣ひ出さるゝ事も
なく、大臣もまた申上げらるゝ旨もなし。

五戒
殺生戒
偷盜戒
邪淫戒
妄語戒
飲酒戒
五常
仁義禮智信

やゝあつて、入道宣ひけるは、あの成親卿が謀叛は事の數にも候
はず。一向法皇の御結構には候ひけるぞや。暫く世を鎮めん
程、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずば、これへまれ
御幸をなし參らせんと思ふはいかに。と宣へば、大臣聞きもあへ
給はず、はらゝとぞ泣かれける。入道さて、いかにや、いかに。と
あきれ給へば、やゝあつて、大臣涙を押へて、この仰承り候に、御運
は早末になりぬと覺え候。人運命の傾かんとては、必ず惡事を
思ひ立ち候なり。又、御有様を見參らせ候に、更に現とも覺え候
はず。流石、我が朝は、邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の
御子孫國の主として、天兒屋根命の御末朝の政を掌らせ給ひし
より以來、太政大臣の官に至る人の甲冑を鎧ふ事、禮儀を背くに
非ずや。就中、御出家の御身なり、忽ちに法衣を脱ぎすて、甲冑

を鎧ひ弓箭を帶しましまさん事、内には破戒無慙の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にも背き候ひなんず。旁、恐ある申事にて候へども、心の底に旨趣を残すべきにも候はず。まづ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩是なり。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下、王土に非ずといふことなく、率土の濱、王臣に非ずといふことなし。されば、かの潁川の水に耳を洗ひ、首陽山に薇を折りし賢人も、勅命背き難き禮儀をば存知すところ承れ。いかに、いはんや、先祖にも未だ聞かざつし太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才愚暗の身を以て蓮府、槐門の位に至る。加之、國郡半ばは一門の所領となつて、田園盡く一家の進止たり。是、稀代の朝恩に非ずや。今此等の莫大の御恩を思召し忘れさせ給ひて、亂りがはしく法皇を傾け

普天の下

溥天ノ下王土ニ非ザルナク率土ノ濱王臣ニ非ザルハナシ。(詩經)

潁川の水

許由の故事

首陽山

伯夷叔齊の故事

參らさせたまはん事、天照大神、正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんず。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。然れば、君の思召し立たせ給ふ所、道理半ばなきにあらず。中にも、この一門は、代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎮めしことは無雙の忠なれども、その賞に誇ることは傍若無人とも申しつべし。聖徳太子十七箇條御憲法に「人皆心有り。心各執有り。彼を是し、我を非し、我を是し、彼を非す。是非の理、誰か能く定むべき。相共に賢愚なり。環の如くにして、端なし。爰を以て、縦ひ人怒るといふとも、却つて我が咎を懼れよ。」とこそ見えて候へ。然れども、當家の運命未だ盡きざるによつて、御謀叛已に露れさせ給ひ候ひぬ。その上、仰せ合はせらるゝ成親、卿を召置かれぬる上は、たとひ君如何なる不思議を思召し立たせ給ふとも、何の

恐か候べき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈、奉公の忠勤を盡くし、民の爲には益、撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加護に預つて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明・佛陀感應あらば、君も思召し直すことな



平
重
盛
「どか候はざるべき。」
君と臣とを比ぶるに、
親疎わく方なし。道
理と僻事とを並べん

に、争でか道理に附かざるべき。是は尤も君の御理にて候へば、叶はざらんまでも、院中を守護し参らせ候べし。その故は、重盛

敍爵
初めて五位に叙せら
るゝこと

迷盧

Sumeru

須迷盧の略
須彌山
高さ八萬四千由
旬
一由旬は六町一
ふ
里の四十里をい

はじめ敍爵より今大臣の大將に至るまで、しかしながら、君の御恩ならずといふことなし。この恩の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案ずるに、一入再入の紅にも過ぎたらん。然らば、院中に参り籠り候べし。その儀にて候はば、重盛が身に代り命に代らんと契りたる侍ども少々候らん。これらを召具して院の御所法住寺殿を守護し参らせ候はば、流石、以ての外の御大事でこそ候はんずらめ。悲しいかな。君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷盧八萬の頂よりも猶高き父の恩、忽ちに忘れなんとす。痛ましいかな。不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲には已に不忠の逆臣ともなりぬべし。大進退、維谷れり。是非、いかにも辨へがたし。申し受くる所詮は、唯重盛が首を召され候へ。その故は、院参の御供

蕭何
漢の高祖の重臣

をも仕るべからず、又院中をも守護し參らすべからず。されば、かの蕭何は大功かたへに越えたるに依つて、官大相國に至り、劍を帶し沓を履きながら殿上へ昇ることを許されしかども、叡慮に背く事ありしかば、高祖重う戒めて、深う罪せられにき。斯様の先蹤を思へば、富貴といひ、榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁極めさせ給ひぬれば、御運の盡きんこと難かるべきにあらず。富貴の家には祿位重疊せり、再び實なる木はその根必ず傷むと見えて候。心細うこそ候へ。何時までか命生きて、亂れん世をも見候べき。唯末代に生を受けて、かゝる憂目に遭ひ候重盛が果報の程こそつたなう候へ。只今も侍一人に仰せつけられ、御壺の内へ引出されて、重盛が頭を刎ねられんずることは、いと易い程の御事でこそ候はんずらめ。これを各、聞き給へ。とて、直衣

の袖も絞るばかりにかき口説き、さめくと泣き給へば、その座に並みる給へる平家一門の人々、皆袖をぞ濡されける。(平家物語)

一九 樟の樹

與謝野 寛

與謝野寛

歌人

詩人

明治六年京都生

わが村の樟の樹よ、幾世經にけん、
手つなぎて人十人めぐり試せど、
大幹は七尺を猶も餘せり。
春ごとに新藁の青注連繩張りて、
村人はゆゝしくも祝ひ仕へぬ。
むかしより樟の名は七村ゆすり、
行きずりの旅人も讚へぬは無し。
立寄れば横五丈、枝さし覆ひ、

冬の日は風をよけ、雪を遮り、
 夏の日は常涼の蔭とぞなれる。
 遠のきて河邊より望めばすべて、
 (大人もまた斯くぞ樹は高く見ゆ。
 大幹は二またに末分れして、
 力ある兩手さし、天にひろげぬ。
 樹の王者、いうくと心足らへば、
 うち仰ぎ、なに祈り、なに懺悔せん。
 樟の樹のくつろげる心に觀れば、
 人の世ぞおもしろく妙に興ある。
 そのはじめこの蔭に遊びし子等よ、
 貝まはし、手毬つき、歌ひ繞りき。

うら若き友どちは笑みて手とりき。
 驕りたる庄屋の子馬を打たせき。
 その子等も束の間に白髪かき垂れ、
 うち歎き、はては皆おくつきの人。
 その子等の後の後、幾世の孫ぞ、
 蔭に來て歌うたひ、またも遊べる。
 あゝ更に興あるは、四時の眺、
 おぼろ夜は花の精あこがれ遊び、
 雪の日は白毛馬空を飛び交ふ。
 しまき風三日吹きて、いづちへ行くや。
 にはか雨さと懸り虹に變りぬ。
 定めなく移りゆく氣色なれども、

おのづから亂れざる律こそはあれ。

智慧あさき短命の人等は知らじ、

天地に何ものかこれに洩れんや、

樹の王者、兩手あげ、大空を抱き、

己が世のおもむきに獨り笑へり、

谷あひの我が村は語るもの無し、

過ぐる人たゞに見よ、古き樟の樹。
(現代日本詩集)

二〇 雀

今は昔、春の頃、日うらゝかなりけるに、六十ばかりの女のありけるが、蟲打取りて居たりけるに、庭に雀のしありきけるを、童部石を取りて打ちたれば、中りて腰を打折られにけり。羽をふため

かして惑ふほどに、鳥の翔りありきければ、あな心憂、鳥取りてむ。とて、この女急ぎて取りて、息しかけなどして、物食はず。小桶に入れて、夜は收む。明くれば、米食はせ、銅薬にこそげて食はせな。どすれば、子ども孫など、あはれ女、刀自は老いて、雀飼はるゝ。とて、にくみ笑ふ。かくて、月頃よく食へば、やう／＼躍りありく。雀の心にも、かく養ひ生けたるを、いみじく嬉しと思ひけり。あからさまにも、へ往くととも、人に、この雀見よ。物食はせよ。などいひ置きければ、子孫など、あはれ、なんぞ雀飼はるゝ。とて、にくみ笑へども、さばれいとほしければ、とて、飼ふほどに、飛ぶほどになりにけり。今はよも鳥に取られじ。とて、外に出でて、手にすゑて、飛びやする、見む。とて、捧げければ、ふら／＼と飛びていぬ。女、多くの月頃、日頃、暮るれば、收め、明くれば、物を食はせ習ひて、あ

はれや飛びていぬるよ。又來やすると見む」などつれづれに思ひていひければ、人に笑はれけり。さて二十日ばかりありて、この女の居たる方に、雀のいたく鳴く聲しければ、雀こそいたく鳴くなれ。ありし雀の來たるにやあらむ」と思ひて、出でて見ればこの雀なり。「あはれに忘れず來たるこそあはれなれ」といふ程に、女の顔を打見て、口より露ばかりの物を落しおくやうにして飛びていぬ。女、何にかあらむ雀の落していぬる物は」とて、寄りて見れば、瓢の種をたゞ一つ落して置きたり。「持て來たるやうこそあらめ」とて取りて持ちたり。「あないみじ。雀の物得て實にし給ふ」とて、子ども笑へば、さばれ植ゑて見む」とて植ゑたれば、秋になるまゝに、いみじく多く生ひひろごりて、なべての瓢にも似ず、大きに多くなりたり。女悦び

興じて、里隣の人にも食はせ、取れども取れども盡きもせず多かり。笑ひし子孫も、これを明暮食ひてあり。一里配りなどしてはてには、まことに勝れて大きなる七つ八つは、杓ひきにせむと思ひて、内につりつけておきたり。さて月頃經て、「今はよくなりぬらむ」と見れば、よくなりけり。取下して口あけむとするに、少し重し。怪しけれども切りあけて見れば、物一はた入れたり。「何にかあるらむ」とて移して見れば、白米しろけねの入りたるなり。思ひがけずあさましと思ひて、大きな物に皆を移したるに、同じやうに入りてあれば、たゞ事にはあらざりけり。雀のしたるにこそ」とあさましく嬉しければ、物に入れて隠して置きて、残りの瓢どもを見れば、同じやうに入りてあり。これに移しく、使へば、せむかたなく多かり。さてまこ

とに頼しき人にぞなりにける。隣里の人も見あざみ、いみじき事にうらやみけり。この隣にありける女の子どものいふやう、同じ事なれど、人はかくこそあれ。はかしくしき事もえし出て給はぬ。などいはれて、隣の女、この女房の許に來りて、さても、こはいかなりしことぞ。雀のなどはほの聞けど、よくはえ知らねば、もとありけむままたのたまへ。といへば、瓢の種を一つ落したりし、植ゑたりしよりのある事なり。とて細かにもいはぬを、猶ありのまゝにのたまへ。と切に問へば、心せばく隠すべき事かは。と思ひて、かう、腰折れたる雀のありしを、かひ生けたりしを嬉しと思ひけるにや、瓢の種を一つ持ちて來りしを植ゑたれば、かくなりたるなり。といへば、その種たゞ一つ賜べ。といへば、それに入りたる米などは參

らせむ。種はあるべき事にもあらず、更にえなむちらすまじき。とて取らせねば、我もいかで、腰折れたらむ雀見つけて飼はむと思ひて、目立てて見れど、腰折れたる雀更に見えず。つとめてごとくに窺ひ見れば、せどの方に米の散りたるを食ふとて、雀の躍りありくを、石を取りて、若しやとて打てば、數多の中に度々打てば、自ら中てられてえ飛ばぬあり。喜びて寄りて、腰よく打折りて後に取りて物食はせ、藥食はせなどして置きたり。「一つが徳をだにこそ見れ。まして數多ならば、いかに頼しからむ。あの隣の女には勝りて、子どもに譽められむ。」と思ひて、籠の中に米撒きて窺ひ居たれば、雀ども集りて食ひに來たれば、又打ちしければ三つ打折りぬ。「今はかばかりにてありなむ。」と思ひて、腰折れたる雀三つばかり桶に取入れて、銅こそげて食はせなどして、

月頃經る程に皆よくなりたれば、喜びて外に取出てたれば、ふらふらと飛びて皆いぬ。いみじきわざしつと思ふ。雀は腰打折られてかく月頃籠めおきたるを、よに妬しと思ひけり。さて十日ばかりありて、この雀ども來たれば悦びて、まづ口に物やくはへたる。と見るに、瓢の種を一つづつ落していぬ。「さればよ」と嬉しくて、取りて三所に急ぎ植ゑてけり。例よりもすると生ひたちて、いみじく大きになりたり。これはいと多くもならず、七つ八つぞなりたる。女笑みまけて見て、子どもにいふやうはかゝしき事しいでずといひしかど、我は隣の女にはまさりなむ。といへば、實にさもありなむと思ひたり。これは數の少ければ、米多く取らむとて、人にも食はせず、我も食はず。子どもがいふやう、隣の女房は里隣の人にも食はせ、我も食ひなどこ

そせしか。これはまして三つが種なり。我も人にも食はせらるべきなり。といへば、さもと思ひて、近き隣の人にも食はせ、我も子どもにも諸共に食はせむとて、おほらかに食ふに、苦きこと物にも似ず、藥きんたなどのやうにて心地惑ふ。食ひと食ひたる人々も、子どもも我も、物をつきて惑ふ程に、隣の人どもも、皆心地を損じて來集りて、「こはいかなるものを食はせつるぞ。あな恐し。つゆばかり煙の口によりたるものも、物をつき惑ひあひて、死ぬべくこそあれ。」と腹立ちて、言ひさだめむと思ひて來たれば、主の女をはじめて、子どもも皆物覺えず、つきちらしてふせりあひたり。いふがひなくて共に歸りぬ。二三日も過ぎぬれば、誰々も心地なほりにたり。女思ふやう、皆米にならむとしけるものを、急ぎて食ひたれば、かく怪しかりけるなめり。と思ひて、残りをば

皆つりつけておきたり。さて月頃も経て「今はよくなりぬらむ」とて、移し入れぬ料の桶ども具して部屋に入る。嬉しければ、齒もなき口して、耳のもとまで一人笑みして桶を寄せて移しければ、虻・蜂・蜈蚣・蛇など出て、目・鼻といはず、一身に取附きて螫せども、女痛さも覺えず、ただ米のこぼれかゝるぞと思ひて、「暫し待ち給へ、雀よ。」少しづつ取らむ」といふ。七つ八つの瓢より、そこらの毒蟲ども出でて、子どもをも螫しくひ、女をば螫殺してけり。雀の腰を打折られて、妬しと思ひて、萬づの蟲どもを語らひて入れたりけるなり。隣の雀は、もと腰折れて、鳥の命取りぬべかりしを養ひ生けたれば、嬉しと思ひけるなり。されば、ものうらやみはすまじきことなり。(宇治拾遺物語)

藤井乙男

國文學者
文學博士
京都帝國大學名譽教授
號は紫影
明治元年淡路國洲本生

二二 雛祭

藤井乙男

鳥の雛になぞらへて小さい人形をひなといひ、それに似合うた家や道具を作つて遊ぶのが雛遊で、平安朝の頃はいつと定まつた時期もなく、又雛祭とは云はなかつた。三月三日を雛祭とするのは多分江戸時代になつてからの事で、寛文・延寶頃から一般に行はれたやうである。

昔上巳の祓といつて三月の上の巳の日に水邊へ出て、人形を流してみそぎをした風習が、小兒のまゝごとである雛遊と結びついて、今日の雛祭となつたのであるが、春もやう／＼深く、吹く風も暖かに、桃櫻の咲きいで野邊の草葉も色ます頃、衣冠さげ髪の内裏雛を上段に、さまざまの人形調度小道具を所狭く次々に飾

寛文

後西天皇・靈元天皇の御代

四代將軍家綱の時

(1661—1688)

延寶

靈元天皇の御代

四代將軍家綱の時

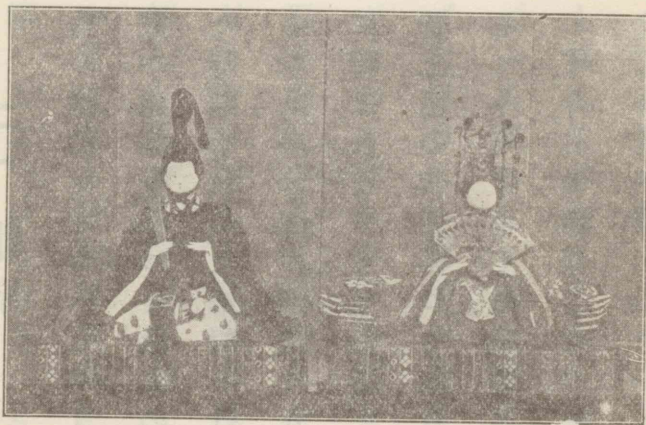
(1688—1715)

上巳

三月上巳官民皆東流ノ水ニ禊ス(後漢書)

りたてて白酒草餅を供へ、花瓶の柳櫻の下蔭にうらわかき少女子の打集ひて、嫁娶炊爨のまねびするも、鯉幟、冑人形の勇ましき男の節供に比べて、内外柔剛の徳を分つや次さしき女の年中行事で、古人が五節供に對する配合對照の用意も窺はれて誠におくゆかしい。

正徳享保の頃には後の雛といつて、九月九日にも雛を飾る風習があつた。何か理由のあつた事か、それとも一時氣まぐれの流行か知る由もないが、これは長く行はれなかつた。何といつても時節のふさ



次 左 衛 門 雛

正徳
中御門天皇の御代
六代將軍家宣、七代
將軍家繼の時
(二七二—二七五)
享保
中御門天皇の御代
八代將軍吉宗の時
(二七六—二九五)

談林
西山宗因を祖とする
滑稽を主とした俳諧

其角
元祿時代の俳人
江戸生
榎本其角
寶永四年(一七二七)歿
年四十七
燕村
俳人で畫家
與謝蕪村
天明三年(一八二二)歿
年六十八

はしからぬが廢絶の原因であらう。
雛祭は徳川期のものであるだけに歌よりも俳諧に親しい。芭蕉も若い談林時代には「内裏雛人形天皇の御宇かとよ」と氣輕な輕口を吐きとばし、酒好きの其角は「もどかしや雛に對して小盃」と大盃滿引の快飲を望み、子のない嵐雪は「うまず女の雛かしづくぞ哀なる」と女房の方へ同情の目を寄せた。
一年ぶりに箱の中より取出す雛の、綿をあて紙に包んだ顔を見るも、物めづらしくなつかしい。
綿とりてねびまさりけり雛の顔
箱を出る顔忘れめや雛二對
それらも美しいきやしやな手で取上げられたのは、見る目もしをらしいが、

其角

燕村

許六
俳人
森川許六
彦根藩士
正徳五年(一五七五)歿
年六十

いかい手に摺みあげたる雛かな
紙雛は古代めきて物さびしく、内裏雛も自ら時代の姿うつりて、あるはさかしく、あるはおほどかに、一樣ならぬがおもしろい。

紙雛のさうと、しさよ立姿
其角

新を好み舊を疎むは古今の人情、母の代の雛は娘たちの笑草となり、明治の時世粧は早くも歴史的参考品となる。

上座ほど雛の姿の新なり
其角

振舞や下座に直る去年の雛
去來

煤け雛しかも上座を召されけり
一茶

緋毛氈の段に銀燭照り輝き、蒔繪道具に金屏風のきら／＼しい富貴のさまも、さる事ながら、よろづ物足らぬがちの貧しき家に、生ひさき見ゆるかはゆき女の子が、心ばかりにかしづき立つる

去來
俳人
向井去來
長崎生
寶永元年(一七二四)歿
年五十四
一茶
俳人
小林彌太郎
信濃柏原生
文政十年(一八二七)歿
年六十五

嵐雪

俳人

服部嵐雪
淡路生

寶永四年(一七二七)歿
年五十四

几董

俳人

高井几董
京都生

寛政元年(一四九)歿
年四十九

太祇

俳人

炭太祇
江戸生

明和八年(一四三)歿
年六十三

召波

俳人

黒柳氏
京都の人

明和八年(一四三)歿
年六十三

りん

倫女

野紅の妻
豊後日田の人

歿年未詳

もなか／＼に風情ありてあはれ深い。

隣々に雛見まはるゝ小家かな
嵐雪

裏店や箆筒のうへの雛祭
几董

人事に特別な興味と技倆とを有する太祇に雛の句が少く、桃の花に託してあつさりと片附けたのは物足らぬ心地する。

桃ありてます／＼白し雛の顔
太祇

掃きあへぬ桃よ櫻よ雛の塵
同

其角の「曲水にあの氣違は茶碗かな」は自ら嘲つたやうにも見え、召波の「雛の宴五十の内侍酔はれけり」はそゞろに源内侍の狂態が偲ばれる。女流作者に佳句の見るべきもの無きは、どうした譯であらう。有りさうで無いものの中に入るべきものか。

雛立てて局になるや娘の子
りん

朱芳妻

傳未詳

玉藻集に見ゆ

なぶらるゝ子持ながらや雛遊

朱芳妻

(江戸文學叢説)

西田直二郎

史學者

文學博士

京都帝國大學教授

明治十九年大阪市生

二二 日本文化

西田直二郎

日本歴史の總體を考ふれば、この歴史こそ、日本人の遺した最も光輝ある成跡であつて、日本人を知る最も正確なる事實である。文化の上にてはこの歴史こそ一般に人間を考ふる最良の對象である。

日本文化の總體を考へて、歴史の大勢のうちに、日本の古き精神が蘇つた時代を凡そ三つ擧げることができる。一は藤原時代であり、二は徳川初期であり、三は明治時代である。

藤原時代は、大化改新以後、奈良朝より盛になつた唐風文物の被

覆を脱し、古き日本の心が自らをあらはす時であつた。而して徳川時代初期から、元祿時代頃までにかけての時代は、それに先だつ戦亂紛争の時代の裡から目ざめ來る日本の和平を愛する心から喚び起されて、古き日本の姿を求めんとした心からである。而して明治時代の初に於ては、徳川時代封建制度の長くつづける爲に生じた固化せるものを破つて、自然の裡に古い精神を更生せしめんとしたものである。

しかし是等の時代は、たゞ古のものが回歸したのではなく、それぞれ特色ある文化をもつてゐる。そこには又時代特有の人間觀があり、それによつて人間なるものを心に描き、理想とするところの人間の描寫が他の時代とちがつたものを有してゐた。随つて是等時代の人間觀を見れば日本人の人間觀の典型が、たや

すく考へられよう。

藤原時代人が心に描いてゐた人間を観るために、その代表作として源氏物語を探ることは、さほど不自然ではあるまい。之に對して徳川時代初期を見ると、その時代の人間なるものについて意識は、かゝる作り物語に於てあるよりは、もつと強く、人間を意識し、人間はまさにかくあるべしとした、その時代に鬱興せる儒學に於てあると言へよう。足利時代の末葉よりあとをひいてゐる、瑣末な事件を材料とせる文學的作品は極めて調子の低いものであり、人間考察には力弱いものであるが、朱子學の勃興は、人間教化の上に使命をもち來り、人間の把握とも言ふべきものに於ては、力づよく要求し、時代の人心の上に、與へてゐるものが多い。而して一般に學問の研究、古代精神の理解にも、こ

御伽婢子

江戸時代の讀物

十三卷

怪談奇話六十餘種を
あつめて教訓の意を
寓したもの
淺井了意著

の人間把握の方法が根柢に動いてゐる。時代の文學では、御伽婢子お伽こ、教訓小説などこの人間觀に追隨してゐるものが多い。而してこの二つの時代の人間觀をその特色の上から考ふるならば、源氏物語の人間は、その物語の主人公、光源氏によつても知られるごとく、人間情智の自由なる行動者であり、またそこに時代の人の心が見られる。即ち約すれば、この人間こそは五慾具備の人間である。人間的欲求は醇化せられてゐるが、なほ感情の自然が流露し、古い日本人の心の醇樸をこゝに見ることのできる、やはり自然の姿の人間である。これに對して、徳川時代初期の學問復興に於てあらはされてゐる人間は、感情の世界を固くも斥けて、人間愛欲は低き自然の心として賤しめ見んとし、その前景に來るものは意志の世界であり、理性的であることである。

而してかゝるものを以て人間性の本質とせんとするものである。約言すれば規範的の人間である。これらに對して、今、明治維新の時代に、幕府政治の永年の硬化から、生々として蘇り來つた心の裡に觀じられた人間は、それは、封建制度の類型的人間觀から脱離するものであり、即ち人間の多種多様性を觀ずるものである。人間の多種多様性といふのは、人間の個々がそれ〴〵に異なるものであり、且異なるものがそれらいづれも、存在の意義を有することを知らることである。このことは、明治初年に興れる人間の平等論がよつて立つところ、また自由民權論を叫んだ人々にとつてもその論理の根據をなしたもの、天賦人權説の主張に於ても人權なるものの基礎をなすところである。さらに、さきに開國論を唱へ、凡ての人間知識人

間生活に、その獨立の價値がそれ〴〵にあり、一定の範疇が最後のものでないことを考へたその精神の地盤をなしたものであるが、また明治の初頭に興隆する、廣く世界に知識を求むるの希望、萬機は公論によつて決せらるべしと思念したその根柢をなすものと言へる。凡ては、人間個々には、相違があり、而も相違には尊重すべきものの存するを覺知することより來るものである。是等論者には、そのあるものは意識されなにしても、なほそれは求められた人間觀であつたのである。

以上の三種の人間觀、人間探究は、各時代を異にし甚だしく隔れる年代に於てあらはれてゐるが、いづれに於ても日本人の心として、而も日本の古き精神の蘇る時代の上に出現してゐるものであることは、注意に値するものがある。而してそれら人間觀

は要するに日本人の姿を求めてゐたものである。こゝに日本文化の歴史の全體的な意味が考へられるのである。

(日本文化史序説)

新定女子國文卷八終

昭和八年一月十八日
文部省檢定
高等女子學校國語科用

昭和八年一月十二日 訂正四版發行
昭和七年八月廿五日 訂正三版發行
昭和七年八月廿二日 訂正三版印刷
昭和三年一月廿四日 訂正再版發行
昭和二年九月廿八日 發行



新定女子國文
改訂全
版十

| 新制 | |
|----|--------|
| 定價 | |
| 卷一 | 二・三 |
| 卷二 | 二・三 |
| 卷三 | 五・六 |
| 卷四 | 五・六 |
| 卷五 | 九・十 |
| 各卷 | 各金六拾參錢 |
| 各卷 | 各金六拾壹錢 |
| 各卷 | 各金五拾九錢 |
| 各卷 | 各金五拾八錢 |

著者 吉田 彌平

發行者 兼 印刷者 金港堂書籍株式會社
原 亮七郎

印刷所 大日本印刷株式會社榎町工場

發賣所

東京市神田區神保町三丁目八番地
金港堂書籍株式會社
振替貯金口座東京八八一五番

